

国際帝国主義の侵略反革命・第三世界支配を粉碎し、全世界の帝国主義を打倒せよ！世界プロレタリア革命—世界プロレタリア独裁—共産主義を実現する新しいインターナショナル（世界単一党）を国際階級闘争の最前線に創建せよ！

番号の内容 1996年 12・2 共産同政治集会報告 12・8 アジア共同行動報告	1996年 1月1日 第486号 編集発行人 海路 薫 一部 300円	1996年 1月1日 第486号 編集発行人 海路 薫 一部 300円	火炎人 ZOROSHI	共産主義者同盟（全国委員会） ■ 大阪戦旗社 大阪市北区本庄西2-8-19 明豊ビル401号 大労協内 TEL.(06)371-3706 ○郵便振替 00930-0-63333 ○銀行口座 第一勧銀 551-1058150
	P2~14	P14~15		
	P15~16			



(写真は、沖縄一日本の反基地一反安保闘争に連帯する)
BAYANの米領事館抗議行動(95年11月 マニラ)

新たな時代に立ち向かう
前衛党を建設せよ

われわれは、この烽火新年号論文において、わが共産主義者同盟（全国委員会）の一九九六年における党建設基調を提起する。われわれは、この基調にもとづき新しい年の階級闘争の最前線に立ちつつ、党建設の大きな飛躍をたたかい取る決意である。すべてのたたかう労働者人民がこの基調のもとに結集されることを呼びかける。

わが党の新たな飛躍への決意

■序章

すべてのたたかう労働者人民の皆さん！新し

い年、一九九六年が幕を開けた。かつてレーニンは、帝国主義とは資本主義の最高の発展段階

であるだけではなく、社会主義革命の前夜であると提起した。世界の情勢は、この提起がまったく正しいものであったことを日々証明している。資本主義の矛盾は全世界的にますます深刻になり、資本主義が歴史的な終幕期を迎えてい

ることはもはや明らかである。全世界でますます多くの人々が、資本主義のもとでの犠牲と苦悩から解放されることを願い、帝国主義による支配からの解放を求めて反抗を強めている。に

もかかわらず、歴史的に命脈がつきた資本主義・帝国主義に終止符を打ち、人類史の新しい段階を切りひらくべきプロレタリアートの階級闘争は大きな困難に直面しつづけており、国際共産主義運動もまた再建に向かう摸索が開始されたばかりである。現在は、何よりも次の革命的激動期に備えた主体の準備こそが要求される「持久戦の時代」である。そうだからこそ、すべての共産主義者と革命的プロレタリアートが、わが国の階級闘争の前衛に立つ单一のプロレタリア前衛党の建設と世界党的再建に向け、長期に渡る新しいたたかいに全力で立ちあがるべき時

なのだ。

長期化する過剰生産恐慌と激化する帝国主義間抗争のただ中で、日本帝国主義は延命の道をアジアへの侵略と支配の強化にますます求め、アジア人民のたたかいで対する正面からの敵として登場しようとしている。そして、保守二大政党政への政治支配体制の再編を推進し、アジアへの侵略と支配に全人民を動員しようとしている。だがこの過程は、不可避に労働者人民の反抗をますます増大させる。ブルジョアジーから犠牲を集中され、連合からも切り捨てられていく労働者下層の憤りが、社会の奥深いところで蓄積されつづけている。沖縄における米兵の少女強姦事件を契機とした米軍基地撤去・安保廃棄を要求するたたかいは、日米帝国主義がもくろむ日米安保の「再定義」に反対するたかないと結合し、沖縄から日本全体へとますます広がりつつある。日本帝国主義の腐朽性と社会の荒廃が進み、青年層をはじめとしてますます多くの人々が将来への不安にとらわれ、行き場のない焦燥感にとらわれ始めている。かつて「総中流化社会」とも呼ばれた「安定期」は終わり、社会の様相そのものが変貌しつつある。

われわれは去った一九九五年、一〇月に開催

されたAWC第一回総会の成功のために全力を集中し、反帝アジア人民政治統一戦線建設の大前進を切りひらいた。また、これと結合したわが国における反日帝國際主義プロレタリア政治闘争の組織化、そのための全国一各地方をつらぬく政治的統一戦線の建設において大きな前進を切りひらいた。そして、七月ARF粉碎闘争、一一月APEC粉碎・日米首脳会談粉碎大阪現地闘争に党として総決起し、一二月共産同政治集会の大成功をかちとった。これらの文字どおり党の総力をあげた決起によって獲得された成果は、スターリン主義の破産と日本帝国主義の「安定期」の終了がその予兆を示し始めた八〇年代後半以降、フィリピンを焦点とした他国の共産主義運動と階級闘争への連帶戦の開始に始まる嘗々たるたたかいの到達点であり、結果した成果であった。さらに言うならば、それは一九七五年の現全国委員会の結党以来、総体として社共に対する左派反対派という枠を越えることができなかつた新左翼運動の限界を突破し、眞のプロレタリア前衛党を建設せんとしてきたわれわれの党建設戦の結実した成果であった。これらこそ、持久戦の時代の本格的な開始期において、われわれがこの新しい時代に立ち向かうためにたたかいつた橋頭堡である。

持久戦の時代の到来の中で、いますべての政治党派がふるいにかけられている。どのようにこの持久戦の時代を耐え、将来の激動期に向けて党と階級闘争の前進を切りひらいていくことができるのか、このことがかけなしにすべての政治党派に鋭く問われている。このもとで、かつて革命党を標榜してきたほとんどの政治党派が次々と社会民主主義・現代カウッキー主義へと転落し、また政治党派としての生命力を失ってきた。このことは、ここに至る長期の過程においてこれらの政治党派がマルクス・レーニン主義から離反し、プロレタリア前衛党の建設か

●96年新年号論文

持久戦の時代の階級闘争を 領導する党建設に結集せよ

ら転落してきたことの必然的帰結であった。しかし、持久戦の時代の本格的開始は、わが国におけるプロレタリア前衛党の建設を一貫して推進し、これからの時代に立ち向かうための橋頭堡をたたかい取ってきたわが党にとっても、大きな自己変革戦を要求するものである。この自己変革戦に成功しなければ、たたかい取ってきた橋頭堡もまた、新たな時代を切りひらく武器へと転化することはできない。

開始された一九九六年、われわれはわが国階級闘争の最前線に立ちつつ、この党建設戦における課題に立ち向かうことを決意している。それは反帝アジア人民政治統一戦線建設の推進、これと結合し世界党の再建を展望したアジアにおける共産主義の国際協議会の創設に向けた新たな国際活動として、また階級的労働運動の

一九八九年から九一年にかけて生起したソ連・東欧の「社会主義」の崩壊から五年が過ぎようとしている。五年前、全世界のとりわけ帝国主義のブルジョアジーは、資本主義の勝利と社会主義の歴史的破産を宣言した。しかし、世界の現実はこの宣言がまったくの虚構であり、歴史的行きづまりを宣告されているのは資本主義そのものであることを日々鮮明にしている。ブルジョアジーは、資本主義の矛盾が世界的に顕在化した現在にあっても、資本主義こそ人類が生みだした最高の経済制度であり、基本的にこれにかわりうるものは無いと言う。断じてそうではない。

ブルジョアジーが言う最高の経済制度、すなわち資本主義的生産様式は、資本家階級による生産手段の私的所有に基づき、資本と賃労働との関係を基本的な生産関係とする生産様式である。この資本制生産においては商品生産が支配的な生産の形態となっている。主要な生産手段を独占的に所有する資本家階級は、生きていくためには自分の労働力を資本家に売って賃金を得るほかにない労働者階級雇い入れ、賃金に相当する必要労働分を越えて労働者を働かせることによって剩余労働（剩余価値）を榨取する。ここにおいて、総体としての労働者階級は生産手段を所有する階級としての資本家階

歴史的終幕期を迎えた資本主義

一九八九年にかけて生起したソ連・

到來した新たな時代とは何か

第一章

級闘争の最前線に立ちつつ、この党建設戦における課題に立ち向かうことを決意している。それは反帝アジア人民政治統一戦線建設の推進、これと結合し世界党の再建を展望したアジアにおける共産主義の国際協議会の創設に向けた新たな国際活動として、また階級的労働運動の

再建と結合したわが国における反日帝国主義ブルタリア政治闘争の新しい飛躍を切りひらくたかいとして実践的には開始される。そして何よりも、わが党の総路線を新しい時代に対応した綱領へと転化し、わが党の基本組織＝細胞を政治的前衛へと変革し、これを領導しうる中央委員会を建設すること、これらを焦点としてわが党をこれからの時代を切りひらくブルタリア前衛党へと変革するための党建設戦として開始される。われわれは、このような一九九六年におけるわが党建設の基調をここに提起する。そして、次号においてこの党建設基調に基づく九六年の政治基調を提起する。すべてのたたかう労働者人民の皆さん、わが共産主義者同盟（全国委員会）の党建設に結集し、新しい年のたたかいを共に切りひらこう。

帝国主義が全世界を支配するという資本主義の最ももんもんとした段階である。商品の輸出入＝世界貿易の引き続く拡大、多国籍資本などによる資本輸出－資本投下の急速な伸長、あるいはIMF－世界銀行や大規模に国際展開する多国籍化した金融資本の動きなどによって、世界经济はこれまでのどの時代よりもはるかに大規模化し一体化した。資本の運動が国境を越えて世界的に拡大していくことによって、資本主義の根本矛盾もまたさまざまな破壊的な形態を取りながら世界的に顕在化してきた。こんにちでは、もはや資本主義は人類の圧倒的多数の生存とあり入らず、歴史的な行きづまりを迎えている。そのことは、帝国主義のもとで生みだされてきた以下のような現実がはつきりと宣告するものである。

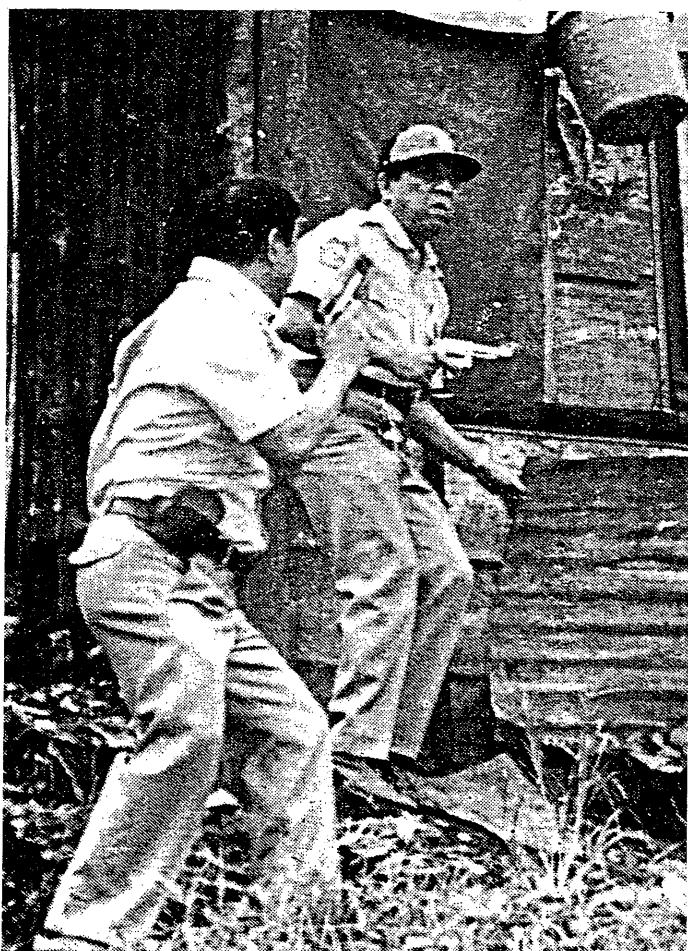
資本の運動が国境を越えて世界的に拡大するにつれて、貧富の格差もまた世界的に拡大しつづけている。帝国主義各国の巨大独占資本は、互いに激しく競争しつつ、より大きな利潤を求めて第三世界諸国、旧ソ連東欧諸国、さらには中国・ベトナムなどの社会主義国にまで急速な侵出をおこなってきた。帝国主義各国のブルジョアジーは、APECなどがはつきりと示しているように資本の自由な運動にとって障壁となる経済的・政治的諸制度の撤廃を要求し、「貿易と投資の自由化」を世界的に推進してきた。ブルジョアジーが言う「貿易と投資の自由化」とは「搾取の自由」のことであり、労働者人民にとっては「飢えと貧困の自由」を強制されることは以外のなにもを意味しない。その結果何が生みだされたのか。世界的にますます巨大な富が帝国主義ブルジョアジーに専有され、ますます多くの第三世界の労働者人民が飢えと貧困に苦しんでいる。帝国主義に従属した資本主義化が進むアジア諸国でもそうである。多くの労働者が帝国主義多国籍企業による直接的搾取のものにおかれ、農民が土地からたき出され、都市貧民がますます増大している。また長期にわたる植民地支配・新植民地支配ゆえに荒廃した諸国では、絶対的窮乏状態にある人民が膨大に存在している。さらに旧ソ連東欧圏でも、帝国主義に従属する急速な資本主義化のもとで労働者は過酷な資本主義的搾取に直面し、明日の生活の糧にもこと欠く貧困層が日々増大し続けている。そして、これら第三世界諸国や旧ソ連東欧諸国を輸出市場・資本投下市場として維持するためのIMF－世界銀行の「構造調整政策」のもので、労働者の賃下げ、福祉切り捨て、人民の諸権利の剥奪など労働者人民に犠牲がますます集中されている。

資本制生産の無政府性に根拠を持つ過剰生産恐慌もまた、一九七〇年代初頭を転機として、資本主義諸国を貫く「世界同時不況」として現出するようになつた。とりわけ最近では、わが国の現在の不況がそうであるように、くり返さ

れる不況が長期化し、資本主義世界は慢性的な過剰生産恐慌とも言うべき状態におおわれている。それもまた必然である。第三世界を中心にして人類の過半が飢えと貧困にあえぐ状況のもとで、これらの人々の必要を満たすためにではなく、ただブルジョアジーの私的な利潤の追求のためにおこなわれる無政府的生産が世界的に拡大されてきたことによって、まさにこのような事態が生みだされているのである。恐慌の到来は、労働者人民の生活に破壊的な影響を与える。帝国主義本国では、リストラ合理化の嵐が吹き荒れ、生産拠点の他国への移転とともに産業の空洞化が一挙に進行し、労働者階級の上層と下層への分裂と労働者下層への犠牲の集中が激しく進行する。しかし、恐慌の到来が最も過酷な事態を生みだすのは、帝国主義の新植民地主義支配下にある第三世界においてである。ただでさえ苦しい生活を余儀なくされる第三世界人民は、恐慌の到来によって生存そのものの危機に直面する。さらに現在の資本主義・帝国主義は、金融恐慌がいつ到来しても不思議ではない状況に直面している。金融恐慌の発生によって帝国主義諸国からの資金の流れがストップした時、帝国主義諸国からの借款や多国籍資本化した金融資本からの融資に全面的に依存した第三世界諸国の経済が破局的な事態を迎えることは確実である。

また、進行する地球的規模での自然環境破壊や世界的な食糧危機が、このままでは人類の生存を脅かすと指摘されて久しい。深刻化する地球環境破壊は、利潤を獲得するためには自然環境破壊をもいとわず、資源を浪費しつくす資本制生産そのものが生みだしたものであり、このような資本制生産が全世界的に拡大してきたことから生みだされたものである。とりわけ帝國主義諸国とのブルジョアジーは、第三世界諸国において資源を奪取し、生態系を破壊し、汚染をまきちらして自然環境に致命的な打撃を与え続けている。ブルジョアジーは、自らが生みだした巨大な生産力を自然環境と調和するよう統制することができない。そのもとで巨大な生産力は地球環境にとって人類の生存を脅かすような破壊的な姿をもって立ちあらわされるのである。食糧危機もまたそうである。ブルジョアジーは世界の人口の増大によって、食糧危機が訪れていると言う。しかし世界の農業生産力は、現在においても地球上のすべての人々が決して飢えることがないだけの農産物を供給しうる。その意味では、食糧危機は存在していない。解決すべき真の問題は、世界的な貧富の格差が拡大するもとで、ひとにぎりの帝国主義国・先進資本主義国においてほとんどの食糧が浪費され、他方第三世界を中心として膨大な人々が飢えに苦しんでいるという現実である。ブルジョアジーが言う食糧危機とは、このよう真に解決すべき問題をおおい隠し、このままではこれ

烽火



写真は、拳銃をかざし、住民に立ち退きを迫る警官隊(11月:フィリピンのスモーキーマウンテン)。世界中で人民の苦難が拡大する。

までのように帝国主義国・先進資本主義国が食糧を浪費することができなくなると言っているにすぎないのである。地球上のすべての人々が飢えることがないだけの食糧を供給しうる農業生産力が存在しているのに、第三世界の膨大な人々が飢えに苦しんでいる原因は、帝国主義による新植民地主義支配のもとで、日々の生活の糧すら得ることができないほどの貧困状態を強いられていることがある。そして、世界の農業生産と流通に支配的影響力をを持つ巨大な帝国主義諸国の大国籍資本化した農業資本が、飢えに苦しむ数十億人の人民を飢えから解放するためにではなく、人類全体から見ればごく一部の人間の欲求を満たすための商品作物生産・飼料作物生産に各国の農業、とりわけ第三世界諸国の農業を歪めてきたことにある。

現実が要求する

世界革命の準備

ブルジョアジーは、資本主義が生みだしたこれらは世界的に深刻化する諸問題を決して解決することができない。資本制生産が持つ無政府的・破壊的性格は、らん然とした帝国主義のもとではや人類の圧倒的多数の生存とあい入れない。人民の生活を向上させ、歴史を前進させていく物質的条件となるべき生産力は、資本制生産のもとで人類の生存と対立する破壊的な姿をもつてますます立ちあらわされるをえない。資本主義が生きのびれば生きのびるほど、そのもとで犠牲を強いられ、苦悩する人民もまた増え続けていく。資本主義は、明らかに歴史的に行きづまり、終幕の時を迎えていた。

このことを根拠として、第三節で見るよう資本主義・帝国主義に対する人民の反抗が世界的に広がりつけている。帝国主義諸国とのブルジョアジーは、ますます激しく抗争しつつも、

歴史的に最後の榨取制度＝資本主義を防衛するために同盟を強制され、第三世界や旧ソ連東欧圏への侵略反革命を強化している。帝国主義諸国が共同で軍事行動を取り、他国に参入した件数は、冷戦の終了後ソ連東欧の「社会主義」の崩壊以前の五年間よりも以降の五年間の方が圧倒的に多い。帝国主義諸国は国連安理会を活用しつつ、九〇〇年から九一年にかけて湾岸戦争のために多国籍軍を派兵し、九二年にはカンボジアPKO、旧ユーゴスラヴィア国連保護軍、国連ソマリア活動に次々と派兵した。九四年には、ルワンダPKOへの派兵、ハイチへの多国籍軍に向けたNATOを軸に六万人もの多国籍軍が派兵されようとしている。そして、NATOを中心とした全欧安保協力会議や日米軍事同盟設など、帝国主義による支配を脅かし不安定化させるあらゆる反抗、とりわけ第三世界における反帝民族解放・社会主義革命運動を鎮圧し、地域的な集団安保機構の創設を推進してきた。これらは、帝国主義による支配を脅かし不安定化させるあらゆる反抗、とりわけ第三世界における反帝民族解放・社会主義革命運動を鎮圧し、すでに歴史的に終幕を迎えた資本主義を人為的に延命させようとする帝国主義ブルジョアジーの必死の努力に他ならない。

ソ連・東欧におけるスターリン主義型社会主義の崩壊にもかかわらず、現在は一九一七年のロシア革命から開始された世界的規模での資本主義から社会主義への過渡期である。そして、資本主義の矛盾が世界的な規模でより破壊的な姿をもつて顕在化し、資本主義が歴史的な行きづまりを迎えているという意味で、現代世界はロシア革命当時に比して過渡期世界としての様相をますます深めている。レーニンは、かつて「帝国主義論」において、帝国主義を資本主義の最高の発展段階であるとともに、それは社会主義革命の前夜であると規定した。帝国主義は、資本主義の矛盾を極限的にまで深める。資本主義の矛盾とそのもとでの苦悩から人民が解放さ

烽 火

れる道は、全世界において帝国主義を打倒し、共産主義社会に向かう物質的条件である社会主义世界を戦取すること以外にはない。

資本主義的生産様式のもとで人類の歴史上最高度に発展した生産力は、もうこれ以上資本の無政府的運動のうちにまかされではならず、これを生みだしたプロレタリアートの計画的な共同管理と統制のもとに置かれねばならない。資本主義のもとで、生産は社会的性質を強め、世界的にますます緊密に結びついてきた。にもかかわらず問題は、生産の指揮権・決定権が生産手段を私的に所有する資本家の手に握られ、それが生産が社会全体の利益のためにではなく、資本家の私的な利潤追求のためにおこなわれ、全体としては非計画的・無政府的なものになつてていることにある。社会的生産の主体であるプロレタリアートは、生産手段を資本家の私的所持有に転化しなければならない。プロレタリアー

れる生産は、一部の国の特権的なブルジョアジーの利潤獲得のためにではなく、まず何よりも飢えと貧困に苦しむ何十億もの世界の人民に最低限の衣食住を保障し、これらの人民の生活を向上させるためにおこなわれる。資本制生産に必然的な無政府的・破壊的性格は克服され、生産活動は社会全体の利益と合致し、人民の生活環境や地球の生態系と調和した計画的なものとなる。このような根本的な変革は、決して一国内や一民族内において実現できるわけではない。プロレタリアートが自らの世界政府を樹立し、一国的・民族的な枠内においてではなく、世界的な変革の主体として登場することを何よりも不可欠とする。

的終幕を座視することもない。命脈が尽きた資本主義に終止符を打ち、現代過渡期世界を止揚する主体はプロレタリアートであり、世界的に結合したプロレタリアートの階級闘争だけが人類史の新しい段階を切りひらくことができる。今日の世界は、ブルジョアジーの国家権力を打倒し、彼らの手から生産手段を奪い、社会的生産を世界規模で組織するプロレタリア世界革命——社会主義世界の実現を要求している。ここに至る過程がどれほど困難で長期に渡るたたかいになるとも、世界の人民が資本主義の矛盾とともにとのもとでの苦悩から解放される道は他にない。こうしてたたかい取られる社会主義世界において、人々はまずは賃金奴隸としてではなく自由な一人の生産者として共同の生産活動にその「能力に応じて」参加し、「労働に応じて」生産の成果を受け取る。そして、やがて生産力の発展にともない、人々はその「必要に応じて」生産の成果を受け取ることができるようになる。生産活動における人々の分業のもとへの固定と

拡大する抵抗と 突破すべき困難

従属は克服され、人間としての全的な発展が可能となる。労働が人間の生きがいと喜びになり、あらゆる社会的差別が克服され、新たな社会＝共産主義社会がその内部から姿をあらわしていくであろう。われわれが組織しようとする社会主義革命とは、共産主義社会の実現を究極的目的とするこのような全世界的な現社会の根本的な変革戦である。それは決して実現できない夢や理想ではない。資本主義が歴史的に行きづまり、終幕の時を迎えることのある現社会は、世界的規模で資本主義の矛盾とそのもとでの人民の苦悩を解決していくために社会主義革命が不可欠であることを日々鮮明にしており、そのための根本的変革のために、その主体である国際主義プロレタリアートへと現実の労働者階級を形成することであり、これを領導するプロレタリアーントの前衛党を建設することにある。

★拡大する抵抗と突破すべき困難★

資本主義の矛盾の深まりと帝国主義による侵略反革命の強化のもとで、全世界的に人民の反抗が拡大してきている。全世界において帝国主義を打倒し、社会主義世界を実現するためたかいは、まさにこの現実の世界の人民の反抗と結びつき、その内部にはらまれる限界を克服し、世界的に結びついた階級闘争の発展を切りひらいていくためのプロレタリア前衛党的共同の努力を通してこそ切りひらかれる。

世界的にますます拡大してきてる。東アジアを典型とする資本主義化が進む第三世界では、零落する農民の反抗、増大する都市貧民の反抗、新たに生みだされた賃金労働者の反抗がますます拡大してきている。また、帝国主義の長期にわたる植民地支配・新植民地主義支配のもとで、絶対的窮乏状態を強制されている人民の反抗がますます増大している。帝国主義ブルジョアジーは、APECやNAFTAのもとでの「貿易と投資の自由化」と資本主義化によって、これらの諸国においても人民は飢えと貧困から解放されると言う。しかし、一九九四年に「NAFT Aの発足は少数民族にとって死を意味する」と宣言して蜂起したメキシコのサパティスタのたたかいがはっきりと突きつけたように、また近くは帝国主義に従属した工業化計画＝「フィリピン二〇〇〇」計画を推進するラモス政権がスマーキーマウンテンなどの都市貧民を銃をもつて強制撤去しようしていることが示すように、それは第三世界人民にさらに犠牲と苦悩を強いるものである。第三世界の人民は、生きていく

総じて、帝國主義とそれに従属する各国支配階級たたかう以外には現実に日々置かれていたためには帝國主義とそれに対する反対の立場が進む。そして、資本主義が進む諸国では、増大する労働者に立脚した労働運動が前進し、各国民の人民のたたかいの中でより重要な役割を果たし始めている。

「社会主義」崩壊後の旧ソ連・東欧圏においても、強まる資本主義的搾取と社会的弱者の犠牲の集中によって、帝國主義に従属した急速な資本主義化に対する人民の反抗がますます強まっている。急速な資本主義化は階級矛盾を激成し、これを推進してきた「改革派」はおしゃべて人民の支持を失った。東欧諸国では社会民主主義政党へと変貌した旧共産党が次々と政権に復帰し、ロシアにおいても旧共産党勢力が伸長してきた。しかし、これらの政党は共産主義を否定し、漸進的なものであっても資本主義化を推進し、NATOへの加盟など帝国主義との従属性同盟関係すら要求する反共政党である。これらの政党が政権につこうとも、ますます階級矛盾が深まるだけであり、増大する貧困層の苦悩は決して解決されない。これらの政党への人民の幻想がうち碎かれた時、旧ソ連東欧圏における巨大な人民の流動が生みだされるであろう。その予兆はすでに始まっている。人民の共産主義からの離反が強く存在しているこれらの諸国では、現在の絶望的状況から脱そうとする人民のエネルギーをファシズム運動を含む排外主義的な民族主義運動が吸収し、これらの部分がすでに大きな勢力となっている。

慢性的な過剰生産恐慌におおわれている帝國主義本国においても、激化する帝國主義間抗争と産業空洞化のもとで、階級矛盾が深まり続けている。労働者は解雇や合理化を強いられ、分裂が拡大し、中小企業労働者、不安定雇用労働者、外国人労働者、失業者・未就労青年層などがますます増大する貧困層を構成してきている。帝國主義間抗争の激化のもとで生き延びていくための企業間の競争も激しくなり、非人間的な労働強化と労働者間の競争がますます激しくなっている。そして財政危機にあえぐ各国の政府は、次々と社会福祉を削減し、社会的弱者の切り捨てを進めている。これらとともに社会の荒廃もまた深刻化してきている。深まる階級矛盾は、未だ明確な階級闘争として立ちあらわれてはない。しかし、それはマグマのように社会の深部に蓄積され続け、下層労働者や都市貧困層の反抗が増大してきている。一九九二年四月に発生した米・ロサンゼルスの「都市暴動」（黒人や中南米からの移民などを中心とする下層労働者・都市貧民の怒りの爆発）は、「暴動」といふ形態ではあれこのマグマが噴出したものであった。また、昨年一月に開始された社会福祉制度の改悪に反対するフランスの労働組合の大規

模なストライキの背景にも、帝國主義本国に共通する階級矛盾の深まりがある。

このように、第三世界や旧ソ連東欧圏、そして帝國主義本国においても、階級矛盾の深まりを背景として資本主義・帝國主義に対する人民の反抗が拡大してきている。しかし、それは旧ソ連東欧におけるスターリン主義型社会主義の崩壊に始まる共産主義運動の大後退期ゆえに、そのほとんどは国際的に結合した明確な階級闘争へと発展させられておらず、さまざまな否定的現状を強いられている。われわれは、この五年間を通して明確になってきた特徴的な事態として次の三つをあげることができる。これらの特徴的事態は、現在の国際的な階級闘争の現実そのものが共産主義を人民の解放の希望として、また解放への実践的指針として復権する新しい共産主義運動、全世界における帝國主義の打倒と社会主義世界の実現に向けて、一国における階級闘争と国際的な階級闘争を固く結合させて組織する真に国際主義的な共産主義運動の再建を要求していることを示すものである。

第一の特徴はこうである。この五年間の間に、帝國主義はアジア太平洋地域や米州地域や欧州において、経済的にも政治的・軍事的にも急速に新しい支配構造をつくりだしてきた。米州地域におけるNAFTAの結成、アジア太平洋地域におけるAPECの国際機構化と日本軍事同盟を中心としたARF-IIアジア集団安保機構の創設、欧州におけるEUの拡大とNATOを中心とした全欧安保協力会議の推進などがそうである。これらは、経済的には激化する帝國主義間抗争のもとで各帝國主義による第三世界諸国や後発資本主義国人民の搾取・収奪の強化を目的とし、政治的・軍事的には帝國主義による支配を不安定化し脅かすあらゆる反抗、とりわけ第三世界における反帝民族解放・社会主義革命運動の前進を未然に抑止・解体する目的のもとに編成されてきた。そしてこれらの新しい支配構造のもとで、帝國主義とこれに従属する各国の反動的支配階級の結合が世界の各地域において飛躍的に強化してきた。

この事態は、各国の階級闘争の国際的な結合を要求し、帝國主義による新たな支配とたかう国際的な反帝国主義共同闘争の組織化を強く要求するものである。そのことは、第三世界人民にとっては自国支配階級との闘争と帝國主義との闘争を固く結合させていかねばならず、帝國主義本国の人民にとっては自国帝國主義との闘争と第三世界人民の闘争への連帯を固く結合させいかねばならないということでもある。一九九二年の一〇月国際会議から開始されたアジアにおける国際的な反帝政治統一戦線としてのAWCの建設は、まさにこの新たな階級闘争の要請に立脚するものであった。しかし世界的に見れば、さまざま試みはありつつも、階級闘争の側はこの帝國主義による新たな支配構造



労働者階級の国際的結合を(写真はインドネシア労働者の闘い)

の編成に対して大きく立ち遅れている。AWCにあっても、その建設戦は未だ開始されたばかりである。このもとで、各国の階級闘争と革命運動は各々ごとに孤立化させられ、各個撃破されていく危険に直面しつづけている。

第二の特徴はこうである。第三世界や旧ソ連東欧圏の人民、とりわけ第三世界人民は資本主義・帝國主義のもとで世界的に見て最も過酷な生活状態を強いられている。それだけに、これらの諸国の人民は現在の生活状態からの解放を求める巨大なエネルギーを秘めており、中途半端な現社会の改良ではなく現社会のより徹底した変革を要求する運動に立ちあがらざるをえない根拠を強く有している。旧ソ連東欧圏におけるスターリン主義型社会主義の崩壊以降も、なおいくつもの諸国において共産主義党がこれらの人民の自然発生性と結びつき、階級闘争へと領導しつづけている。にもかかわらず、現状ではこの解放を求めるエネルギーと社会変革の要求の多くが、排外主義的民族主義や宗教原理主義のもとに統合され、世界各地で「地域紛争」が発生してきた。

排外主義的民族運動や宗教原理主義運動も、時には帝國主義や各国の支配階級に反抗する。しかし、これらの運動は人民の貧困と苦悩の根拠が資本主義・帝國主義そのものにあることをおおい隠し、帝國主義の打倒と社会主義革命という根本的な解放の道から人民をしゃ断し、共産主義運動と階級闘争に敵対する。そして、プロレタリアートと被抑圧人民を民族や宗教ことにバラバラに分断し、互いに激しく対立させる。その結果、どれほど悲惨な事態が生みだされ、プロレタリアートと被抑圧人民の無益な血が流れってきたことか。旧ユーゴスラヴィアのボスニア・ヘルツェゴビナの事態をはじめとして、冷戦崩壊後の五年間はこのことを疑問の余地なく示してきた。帝國主義は、このように人民が民族や宗教ごとに分断され、激しく対立する根拠を歴史的に形成してきただけではなく、帝國主義間の利害対立を内包しつつ自らの利害から介入をくり返すことによってますます事態を悲惨なものにしてきた。民族や宗教による人民の分断と対立を克服できるのは、その本質において国際的な存在であるプロレタリアートである。これらの否定的事態は、プロレタリアートの国際性を發揮させることによって分断と対立を克服し、人民の解放を求めるエネルギーと社会変革の要求を帝國主義の打倒と社会主義革命に向けた階級闘争へと領導していく新しい共産主義運動の創建を鋭く要求している。

第三の特徴はこうである。排外主義的民族主義や宗教原理主義のもとで、人民が民族や宗教ごとに分断・対立させられていくという否定的事態の一方で、人民の新しい自然発生性が世界的に生みだされている。この数年、国連は地球環境問題、第三世界の貧困問題、女性への性差別と抑圧をテーマとする大規模な国際会議を開催した。一九九二年六月にブラジルのリオデジャネイロで開催された「国連環境開発会議(地球サミット)」、一九九五年三月にデンマークのコペンハーゲンで開催された「国連社会開発サミット」、同年九月に中国の北京で開催された「国連世界女性会議」がそうである。これらの国際会議が主テーマとした諸問題は、まさに資本主義・帝國主義そのものが生みだし、あるいは深刻化してきたものである。国連がこれらが資本主義・帝國主義に対する人民の反抗をますます拡大してきたために、ブルジョアジーにとってすらもはや無視しえないものになってしまったことを示すものである。これらの国際会議には、各国民政府や行政機関からの派遣とは別に全世界から膨大な大衆組織やNGOが集まり、さまざまなフォーラムなどを開催するとともに、これらの国際会議に自らの要求を反映させるための動きをおこなった。帝國主義諸国や先進資本主義国からだけではなく、無数の第三世界諸国からも多くの人民がこの動きに参加した。

ここに示される人民の動きには、われわれが着目すべき新しい人民の自然発生性が内包されている。すなわち、ますます多くの人民が自らの抵抗運動や現社会の変革をめざす運動を一国家や一民族の枠内に止めるのではなく、世界的に結合させていくことをめざそうとしている。主権国家や民族が持つ狭隘さに関する認識がぐくまれ、貧困の問題であり、自然環境破壊の問題であれ、女性への性差別と抑圧の問題であれ、世界的規模での現社会の変革として展望しようとする志向が強まっている。そして、国連社会経済理事会や国連人権委員会などの国際機構を利用して自国政府を規制し、一国内における運動が直面する自国政府との力関係ゆえに拡大したことによって、資本主義の矛盾も

また世界的に発現するようになったこと。帝国主義による全世界的な支配のもとで、これらの矛盾が人類の生存と対立する破壊的な形態をもつてますます立ちあらわれてきたこと。これらの資本主義の矛盾と帝国主義による支配に根拠を持つ人民の犠牲や苦悩は、ますます一国内や一民族内において解決することはできず、世界的な現社会の変革としてしか展望しえなくなってきたこと。そして、世界的に拡大する資本の運動そのものが、国家や民族の枠を越えた人民の結合が促進されていく条件をつくりだしてきたこと。これらを根拠とした新しい人民の自然発生性としてとらえられねばならない。

しかしこの増大する人民の自然発生性は、現在においては主要に国連機構などのブルジョアジーが支配する国際機構に自らの要求を反映させることをめざすという形態であらわれ、資本主義・帝国主義への根本的批判と社会主義革命の要求には行きつかず、世界的に結合した階級闘争へと転化されてはいない。その主因は、これらの世界的な現社会の変革とたたかいの結合を志向する人民が依拠することができ、この新しい自然発生性を世界的な階級闘争へと転化していく国際的な反帝統一戦線の建設が未だ開始されたばかりであり、これらの人民に共産主義を解放の希望や実践的指針として提起する新しい共産主義運動の建設が決定的に立ち遅れていることにある。帝国主義ブルジョアジーは資本主義・帝国主義の改良の枠内に封じ込め、帝王主義による支配の補完物へと歪曲していこうとしている。そして、さまざまな社会民主主義党派や現代カウッキー主義党派がこの人民の自然発生性にまわりつき、帝国主義ブルジョアジーと歩調をあわせて改良主義の沿地へと引きこもうとしている。また帝国主義本国では、帝国主義抑圧民族と帝国主義の支配下にある被抑圧民族の区別を否定し、帝本国主義の立場からこの人民の自然発生性を歪曲していこうとする政治党派や小ブルインテリゲンチアが無数に存在している。

持久戦の時代の 新たな党建設へ

われわれは、ソ連・東欧における社会主義の崩壊以降開始された新しい時代に生きている。それでは開始されたこの新しい時代とはいかなるものなのか。われわれは、これまでの論述を踏まえ総括的に次のように提起する。

資本主義の最高の発展段階である帝国主義のもとで、資本主義の歴史的な行きつまりが明確になり、帝国主義とは社会主義革命の前夜だという歴史的性格がますます鮮明となっている。

資本主義の矛盾が世界的に深まり、そのもとでの人民の苦悩がますます耐えがたいものになり、資本主義・帝国主義に対する人民の反抗が世界的に拡大し続けている。そして、金融恐慌の到来などによって資本主義諸国が破局的な経済的危機に直面し、世界的な激動期がいつ到来しても不思議ではない事態が煮つまりつつある。まさにこのことは、全世界における帝国主義の打倒と社会主義世界を実現するプロレタリア世界革命によって、歴史的に終幕を迎えた資本主義に終止符を打ち、人類史の新しい段階を切りひらいていくことをますます要求している。

他方において、これを実現する主体であるプロレタリアートの国際的な階級闘争は三節で提起したように大きな困難に直面し続けており、階級闘争を領導すべき共産主義運動は世界的に大きな後退局面のただ中にある。一九八九年から九一年にかけたソ連・東欧における社会主義の崩壊は、世界の共産党一共産主義運動にきわめて大きな打撃を与えた。世界のスターリン主義者は打ちのめされ、スターリン主義共産党のいくつかは実際に解体・消滅してしまった。しかし、本当に深刻な問題は次の点にあった。すなわち、スターリン主義党的解体と軌を一にして、世界の労働者人民の側に、社会主義・共産主義への絶望観と、これから離反が広範に発生したことにある。スターリン主義の破産の悲惨な結果を押しつけられたことになった旧ソ連・東欧諸国はもとより、欧米日の帝国主義諸国、そして第三世界諸国においても、社会主義・共産主義は「二〇世紀の大いなる失敗」であったというような誤った認識が人々を深くとらえた。一九七七年のロシア革命以降、共産主義運動は糾余曲折はあるながらも基本的に着実な前進を続けてきたが、それは八九年から九一年を旋回点として大きな後退局面を迎えた。



写真は、APEC・日米首脳会談粉碎闘争(95年11月・大阪)

この事態は、スターリン主義の破産を総括した新たな共産主義運動の再建を全世界の革命的プロレタリアートに要求している。スターリン主義は、そのマルクス・レーニン主義、生産力主義と一国社会主義路線ゆえにソ連東欧諸国において無残な破産をとげた。同時に、スターリン主義と共通する生産力主義や一国社会主義路線に立つ共産主義運動は、これから時代の階級闘争を切りひらくいくことができないことがますます明確になってきている。なぜなら国際的な階級闘争の現状は、全世界的に深まる資本主義の矛盾と強まる帝国主義の支配のもとで、共産主義を苦悩する人民の解放への希望やたたかいの実践的指針として復権していく新しい共産主義運動、全世界における帝国主義の打倒と社会主義世界の実現に向けて、一国における階級闘争と国際的な階級闘争を固く結合させて組織する真に国際主義的な共産主義運動の再建こそ要求しているからである。スターリン主義と共通する生産力主義や一国社会主義路線

われわれは、この新しい時代の要請を正面から受け立とうと決意している。われわれは、わが国階級闘争の最前線に立ちつつ、自らの自己変革戦を力としてわが国階級闘争をプロレタリア前衛として領導しうる单一のプロレタリア前衛党を建設するためのたたかいを推進する。同時にわれわれはこのことと結合させて、将来の激動期の到来に備えた国際的な準備を他

に立つ共産主義運動が、このような国際的な階級闘争の新たな要請にいささかも応えることができないことは明白である。スターリン主義の破産を総括した国際共産主義運動の再建が、ソ連・東欧における社会主義の破産という事態からだけではなく、まさに世界の現実の階級闘争の中から鋭く要求されてきているのだ。そして、このような共産主義運動の再建は、世界的に見れば未だ模索が開始されたばかりである。

このようすに資本主義の歴史的行きづまりが明確になり、プロレタリア世界革命がますます要求されているにもかかわらず、これを実現する主体の側の準備が決定的に立ち遅れていること、ここに新しい時代の特徴がある。われわれはこの直面する一時代を「持久戦の時代」と規定する。それは革命運動の攻勢期ではない。共産主義運動を壊滅しようとする敵の攻勢から党と革命運動を防衛しきることを不可欠に要求する一時代である。しかし、持久戦は単なる防衛戦ではない。いつ到来しても不思議ではない世界的な激動期に備え、これをわが国における武装蜂起一プロレタリア世界革命へと転化する主体の側の準備戦を全力で組織すべき一時代である。持久戦の時代の開始期において、何よりも根幹的な課題はこの一時代の階級闘争を領導するプロレタリア前衛党の建設であり、世界党の再建を切りひらくことにある。そのことは、われわれをも含むプロレタリア前衛党たちと zwar 世界のすべての党派に厳しい自己変革戦を要求し、国際的な共同の努力を開始していくことを要求している。

われわれはこの新しい時代の要請を正面から受け立とうと決意している。われわれは、わが国階級闘争の最前線に立ちつつ、自らの自己変革戦を力としてわが国階級闘争をプロレタリア前衛として领导しうる单一のプロレタリア前衛党を建設するためのたたかいを推進する。同時にわれわれはこのことと結合させて、将来の激動期の到来に備えた国際的な準備を他

国の共産主義党との共同の努力をもって推進する。その最大の焦点は、これまでのAWC運動の成果に立脚しつつ、強大な反帝アジア人民政治統一戦線を建設することであり、アジアにおける共産主義党の国際的な協議会を創建していくことにある。われわれは続く第一章において

この国際的実践について提起し、最終章においてこの国際的実践の推進をも含む九六年のわが共産主義者同盟（全国委員会）の主体的な党建設戦について提起する。

■第二章

アジア共産党協議会の創建を

国際共産主義運動は現在、世界的な後退期にある。一九九〇年代初めのソ連・東欧諸国における社会主義の崩壊以降、旧社会主義諸国の政権であったスターリン主義諸党は破産の原因を真摯（しんし）に自己総括することなく、自己解体するか社会民主主義政党に転換することをもって延命を画策してきた。他方で、中国・ベトナムなどの党も、のきなみ資本主義化の道をひた走ってきた。そして、これまでプロレタリア国際主義の旗を堅持してきた数少ない例であるキューバにあっても、米帝の封じ込め政策によって極めて困難な社会状況を強いられており、われわれをも含めて世界の共産主義者・革命的プロレタリアートはこの困難を突破するための連帯実践に成功していない。

帝国主義諸国では、このような国際共産主義運動の現状にも影響され、また帝国主義ブルジョアジーがその労働手代を用いて労働運動を骨抜きにしてきたこともあり、共産主義運動から多くの労働者を遠ざける状況が続いている。帝国主義諸国の多くのスターリン主義者は社民化し、共産主義の組織化を実質的に放棄した。また第三世界においても、多くの諸国で帝国主義と各國政権の強権的な弾圧などにより、革命闘争、共産主義運動が労農人民から孤立化させられたり、各国ごとに分断され封じ込められている状況にある。われわれは、このような現状を何としても突破し、国際共産主義運動の再建に向かた現実的で実践的なたたかいに立ちあがつていかねばならない。

★世界的な現状況★ 共産主義運動の

しかしながら、国際共産主義運動は単に後退期にあるのではなく、次の飛躍期を向いた準備をなす条件の形成期を迎えているということができる。

それは第一に、旧ソ連のくびきから全面的に解き放たれて、スターリン主義・一国社会主義

路線の歴史的破産の全面的な総括をめぐる論争と新たな国際共産主義運動を開始しうる条件が形成されつつあること、第一には、旧ソ連・東欧諸国や中国などにおける急速な資本主義の発展から新たな労働者階級が生まれ、階級闘争が組織され、その中からこれまでのスターリン主義党に代わる新たな共産主義党建設の主体が形成されること、第三には、帝国主義間抗争の激化と他方での帝国主義による侵略反革命によって第三世界諸国の反帝闘争は高揚せざるをえなし、その闘争を首尾一貫して指導する新たな共産主義党建設の課題がそれぞれの国において緊要になることである。

近年の旧ソ連・東欧諸国での急速な資本主義化のもとで各国民の生活は一層困窮し、耐えがたくなった人々はボーランド、ハンガリー、スロバキア、ブルガリアなどで旧共産党の政権復帰を求めた。ロシアにおいてもソ連崩壊後、帝国主義国の全面支援を受けたエリツィンが政権を担つたが、多くの人民の生活状況がますます悪化する中で、旧共産党勢力およびファシズム勢力が力を増してきている。このことは、旧ソ連東欧諸国における資本主義化が結局どこの国にあってもスターリン主義支配のもとで生みだされた問題の解決とはなりえないことを鮮明にした。そして、やはり共産主義を人民の希望として復権するプロレタリアートの前衛党、スターリン主義路線を根本総括しうるプロレタリアートの新たな前衛党の建設が各國労働者人民の主要な共通課題となるべきことを物語つてお

り、各國での本格的な資本主義化が新たな階級闘争を発現させ、その中から新たな共産主義党建設をめざす先進的プロレタリアートが生まれてくることに期待しうることを示している。中國共産党やベトナム共産党的経済開放方針も、それぞの国での資本主義の発展によって、早晚労働者階級の階級闘争の発展という新たな息吹を生みだし、その闘争の中からこれまでの党の路線の抜本的総括を成し、スターリン主義党に代わる新たな共産主義党の建設主体が形成されうるであろう。とりわけ帝国主義の市場争奪戦の主戦場となるアジアにおいては、共産党が

★限界が明らかに★ 毛路線への回帰

われわれは国際共産主義運動の再建に向けて、その壮大な課題からすればまだ最初の橋頭堡をたたかい取るものでしかなかったとしても、われわれ自身の主体的実践として反帝アジア人民政治統一戦線を建設し、またアジア諸国の共産主義党・組織の新しい結合をかちとらんとしている。われわれはここに国際共産主義運動の再建に向けたわれわれの主な戦場を設定するが、それ以外にも国際共産主義運動の再建に向けた各國共産主義党・組織の会議や意見交換の場の形成という面で、相対的に最も活発な実践を開始しているものとしてベルギー労働党（PBTB）

いったん壊滅させられたタイ、マレーシア、インドネシアなどでも急速な資本主義の発展のもとで労働者階級の闘争が不可避に発展せんとしており、その中から再び階級闘争の首尾一貫した導き手としての前衛党＝共産主義党の再建の課題が登場している。また、現在において第三世界の革命闘争の最前線を担っているフィリピンにおいても、フィリピン共産党とこれに領導された革命運動は、自國革命の路線が直面する課題に答えんとすれば、国際共産主義運動の再建、とりわけアジアにおける共産主義運動の連帶を発展させるための課題に取り組まざるを得なくなるであろう。

しかし、前述したことはそのままでは国際共産主義運動の再建に向けた客観的条件でしかない。それゆえにこそ、現在は持久戦を強いられる帝國主義足下の共産主義党であるわれわれの特別の任務が重要となってくるのである。

すなわち、国内および国際的にプロレタリアートを全世界の帝國主義の打倒－世界プロロの樹立、それを率いる世界党の建設の事業に向かわしめるために、これまでの国際共産主義運動、スターリン主義・一国社会主義路線の全般的総括に向かう国際的な共産主義党間の論争と党派闘争を組織化していかねばならない。

とりわけ、われわれはそのような総括論争の組織化を机上の論議としてではなく、帝國主義との闘争を共同の統一したたかいとして実践していく中で推進していかねばならないと考へる。そうであるがゆえに、われわれはアジアにおいて日本帝との闘争を遂行する反帝アジア人民政治統一戦線の形成にここ数年間全力を注いできた。AWC運動への支持、全面協力がその一つである。それらの実践に支えられてこそ、国際共産主義運動の再建、統一という巨大な任務の遂行に向けて、まずもってアジアにおける共産主義党・組織の結合をかち取らんとするわれわれの基本方針が実現されるのである。



世界党の再建を(写真は、1920年のコミニテルン2回大会)

これらの両党を中心とした共産主義運動の統一の動きは、その規模からみれば未だ小さなものであり、国際共産主義運動の再建を規定しきるような内容と形態を持つものではない。しかしながら、再建のために必要な重要な論議点のいくつかを示唆するものとしての意味は有するし、なによりも現在の状況のもとでは各国の党が、とりわけ旧ソ連・東欧諸国の今後の状況も把握しながら、意見交換や交流の場を持つことは小さからぬ意義を有するものである。再建のための重要な論議点としては、レーニン死後の国際共産主義運動の発展にとって、スターリンや毛沢東の指導路線の路線的総括、現中国共産党、朝鮮労働党、ベトナム共産党などの評価等々を国際的なプロレタリア人民の闘争、今後の国際共産主義運動の発展のために実践的・路線的意味を有するものとして明確にしていくことがあり、そのための共産主義者党間の連帯と実践的結合を基礎にした論争の組織化をじっくりとやっていくべきなのである。

組織を結集せしめた国際会議を積み重ねてきた。MLPDはそれまで旧毛派共産党の結集体であった国際会議の主導権を一九九四年四月の「第四回マルクス・レーニン主義党・組織の会議」から握り、「現代修正主義とたたかい、マルクス・レーニン主義―毛沢東思想を支持する」ことを基準にした国際共産主義運動の統一へ向けた実践に踏みだした。PTBもそれまで毎年メーデーの後に国際会議を積み重ねてきたが、一九九四年五月の「国際セミナー」における「国際共産主義運動の統一」のための提案」をもって本格的な動きを開始した。PTBは修正主義との闘争の重要性を提起してはいるが、結集の基準としては「マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を信奉するすべての党」に設定し、幅

課題、すなわち植民地・半植民地国の革命をいかにして社会主義革命に転化できるのか?という課題に対しても、帝国主義の支配下にある圧倒的多数が農民である資本主義の未発展な国においても、プロレタリア前衛党の意識的な指導によって農民をプロレタリア階級へと階級形成していくことによって、社会主義革命へと連続して發展する革命として反帝民族解放・民主主義革命を領導できることを実証し、実践的・実際的な解答を与えた。その点では毛沢東路線はさまざまな誤りを有しつつも、基本的にはスターリン主義路線と分歧した社会主義路線を志向しようとしたものであり、また革命前の中国と現在の第三世界諸国のおかれている状況の類似性ゆえに今なお多くの共産党とりわけ第三世界諸国の共産党にとっては依拠しうる路線としての位置を有し続けてきたといえる。しかしながら、毛沢東路線は第三インターの逢着課題の全面的解答たりえず、とりわけ一国における革命の勝利と世界革命の勝利との時間差をいかに克服する

一国社会主義路線の根本的総括こそが最重要課題であることを指掲していない。さらには世界各國の共産主義黨の共通の基軸的総括課題として、第三インターが逢着し解答しえなかつた課題、すなわち勝利した一国の革命はいかにして世界革命まで延命し、その最終的勝利を実現するのかという問題をすえられていないからである。

P T Bはそれほど鮮明ではないが、MLPDは毛沢東路線への回帰をもつて國際共産主義運動の再建の基軸足りうると主張している。それに関するわれわれの見解は次の通りである。毛沢東路線は第三インターが逢着したもう一つの

容易ではなく、それには極めて多くの時間を必要とするだろうからである。それゆえにわれわれは、前述したようにアジアにおける共産主義党・組織の連帶、結集をまずなによりも重視し、その前提として先進的な大衆組織による反帝アジア人民政治統一戦線の形成、強化に全力をそそがんとしているのである。

その上で路線的理論的作業の面に関しても、現状ではP.T.BとMLPDはそれぞれを中心とした結集体での論議を基盤にして、国際共産主義運動の再建のための路線的基軸を鮮明にできることは思われない。両党ともに、国際共産主義・

同時に、われわれは國際共産主義運動の再建という場合、そのことはまずもって各国のプロレタリアートの共通の敵たる帝國主義ブルジョアジーとの闘争を共同で發展させていくという実践に支えられねばならないと考える。そのような共通の実践と切り離された純然たるイデオロギー論争のみをもつての國際共産主義運動の再建の試みは空中分解してしまうであろう。イデオロギー的・スターリン主義・一国社会主義路線の総括における一致をかちることは

社会民主主義に 転落とげた日共

前進させる時に、日本においては日本共産党との党派闘争が不可避となる。ブルジョアジーのもくろみどおり二大保守政党制が確立されつゝある現在、日共のみが唯一といつてよい議会内反対派政党としての位置を保ち、労働者人民への無視しえぬ影響力を有し続けているからであり、かつ彼らの一国主義の立場からする結果として、最近とみに第三世界人民の闘争に連帯する日本人民の運動への敵対、悪宣伝を強めていることに示されるよう、彼らは必ずアジアにおける共産主義運動の再建の敵対者となるだろうからである。保守支配政党に対する議会内反対派であった社会党が基本方針上も組織上も完全に保守政党に転化しきったいま、日共もまた社会党に代わる社会民主主義政党へと純化した。われわれはこれまで日共のスターリン主義・一国社会主義路線を批判・暴露してきたが、彼らはもはやそことどまつていない。日共は、資本主義体制の破壊ではなく改良を求め、ブルジョア権力の打倒をもってプロレタリア独裁権力を樹立するのではなく、現政府の民族民主統一戦線とする社会民主主義へと純化しきった。そして、他国人民とりわけ第三世界人民の闘争に対

堅持を重要と考え 王沢東路綱そのものの限界の突破を試みる党が出てくることは期待しうることであり、われわれはこれらの諸党との関係を保ち、真剣な党派論争をおこなっても崩れぬ同志的党闘争を構築しつつ、ともに国際共産主義運動の再建のための闘争を担っていく努力を継続していく。

のかという課題に対し、ネップの導入と世界
の建設という相互に切り離しえぬ任務をもつ
て路線的・実践的に答えようとしたレーニン第
三インターのたたかいを肯定・継承・発展させ
えず、第三インター解散時における毛沢東の世
界党不要論にも典型的に見られるように、それ
らを放棄したスターリン主義路線の枠内にとど
まつた。それゆえに、スターリン主義路線に代
わる国際共産主義運動の基軸路線を打ちだすこ
とに敗北し、スターリン主義路線の中国版とも
いえる鄧小平路線の台頭を許したのである。そ
のような限界を有した毛沢東路線へ回帰するこ
とによっては、国際共産主義運動の再建をかち
取りえないことはあまりにも鮮明である。

しかしながら、現在の共産主義党・組織の中
ではマルクス・レーニン主義党建設を中心任務
とし続いている旧毛派諸党の中から、真摯（し
んし）にスターリン主義・一国社会主義路線の
総括を重要と考え、毛沢東路線そのものの限界
の突破を試みる党が出てくることは期待しうる
ことであり、われわれはこれらの諸党との関係
を保ち、真剣な党派論争をおこなっても崩れぬ
同志的党関係を構築しつつ、ともに国際共産主
義運動の再建のための闘争を担っていく努力を
継続していく。

してプロレタリア国際主義に基づく支援や連帯、共同の反帝闘争の追求を完全に放棄した。日共は、危機の時代には帝国主義と一体になって、第三世界人民の闘争に対する排外主義からする敵対、第三世界人民の闘争への攻撃を不可避免とするであろう。

日共はソ連・東欧諸国における社会主義の崩壊というドラスティックなスターリン主義路線の全面破産を目の前にして、一九九四年七月に二〇回大会を開催し、つじつまの合わなくなつた自らの綱領を改定した。そこにおいて社会主義・共産主義の実現を実質的に放棄し、自国帝国主義の権益の防衛、資本主義の擁護と改良に焦点を置いた綱領を完成させたことによつて、日共は自らの党路線と党組織の全面的な社会民主主義化をはかった。

彼らは日本が帝国主義であることを決して認めず、「日本を支配しているのはアメリカ帝国主義とそれに従属的に同盟している日本の独占資本であり」「日本はアメリカ帝国主義の従属国となっている」（以下引用はすべて日共新綱領）、それゆえに「眞の独立と政治・經濟・社会の民主主義的変革を達成」せねばならず、そのためには「民族民主統一戦線をつくり、その基礎のうえに独立、民主、平和、非同盟中立、生活向上の日本をきづく人民の政府、人民の民主主義権力を確立すること」を任務にするとして

これは資本主義（帝国主義）の存続を前提とした改良主義運動、よりよい資本主義を求める運動にほかならないものであり、自国帝国主義との闘争を自らの任務として設定しえず、危機の時代には容易に排外主義へと転化した社民の綱領・路線と基本的な違いはない。そして、当然のこととしてプロレタリア國際主義の見地、実践とは無縁になり、日本帝国主義とたたかう第三世界諸国人民の反帝闘争への支援・連帯は綱領のどこにも見あたらない。さらに「世界の平和と進歩の勢力と連帯して（日本の）独立と民主の任務をなし遂げる」という表現によつて、日共は自国帝国主義打倒、自國帝とたたかう第三世界人民の闘争への支援・連帯という帝國主義本国の党の責務を放棄し、もつて自國帝國主義を免罪し、その他国への侵略を容認することとなるのである。

日共が他国の労働者人民の反帝民族解放闘争の敵対者になることは、彼らの反プロレタリア国際主義、排外主義的態度の現在的あらわれとして、フィリピン共産党に率いられたフィリピン労農人民の闘争に対してテロリスト集団のテロリズムだと悪罵を投げつけ、日本の運動組織はKMUなどのフィリピン人民の運動組織から手を切るべきだという大々的な悪宣伝を日共が展開し、日米帝に手を貸していることを見れば充分であろう。

アジアを焦点に
★
推進すべき課題★

国際共産主義運動の再建には充分な時間が必要であり、短期的な国際共産主義運動の統一と再建、その組織的表現としての第三インターの再建がかちとられることは望みがたい。しかし、われわれはイデオロギー的・路線的に各国の共産主義党が全面的に一致するためには長期の過程が必要にならうとも、帝国主義に対する共同闘争を推進・強化していくための最低限譲れぬ必要な実践的基軸に関する一致を求めて、各党間の連帯関係・論議関係を形成することは現在においても十分に可能だと確信する。

実践的基軸は、次のものである。第一には、国際的な反帝闘争を共同して推進すること、とりわけアジアにあっては日米帝との闘争をアジア人民の共同の闘争として組織化していくことである。第二には、帝国主義と自国支配階級に抗するより困難な闘争をすすめているアジア第三世界人民の闘争、革命運動への支援、連帯を実践していくこと、各国における革命運動を帝國主義の攻撃から防衛することである。第三には、第三世界諸国をはじめアジア各国の今後高揚していくであろう労働運動にたいして、あらゆる側面から支援、連帯を具体的に実践していくことであり、アジアにおける労働運動の連帯を推

第一歩的なものとはいえたまく前進してきたからである。

アジアにおける共産主義運動の再建と統一という巨大な任務にとりくむ場合、すべての共産主義党にとって中国に対する態度、あるいは中國共産党に対する評価と態度が実践的にも路線的にも避けて通れぬ重要課題となる。われわれは中国共産党の現指導部の路線は、基本的にレーニン第三インターが達成した課題を全面的に放棄したスターリン主義路線であり、全面的な資本主義化の道をひた走るもので、他国のとりわけ第三世界人民の反帝民族解放・社会主義革命に連帶・支援するのではなく、むしろそれに敵対し、阻害する路線であると規定する。そして、中国における資本主義化の進行は労働者人民との矛盾を一層尖鋭化させ、新たなプロレタリアートの階級闘争を激化させていくことは不可避であり、その中から新たな共産主義の建設主体

もまた生みだされていくであろう。このように新たな階級闘争と前衛党的建設主体への連帶戦という意味をも含めて、われわれはアジアにおける共産主義運動の再建を毛沢東路線の総括を内包したものとして準備していかねばならない。そして、その毛沢東路線の総括もまた一般的にアーバン人民の闘争にとっていかなる役割を果たしているのかなどの具体的現実的直面課題との関連で論議し、総括をなしつつ、一致した立場を形成していくものとして組織していかねばならないのである。われわれは、アジア人民の日本帝国主義との闘争を最後の勝利まで領導するアーバンの共産主義党・組織の団結体・協議会を必ず建設せねばならない。それが、当面のわれわれの国際共産主義運動再建上の最重要課題である。

■第三章 われわれの新たな党建設任務

われわれは直面する一時代を「持久戦の時代」と規定する。資本主義は歴史的な破壊をますますあらわにして、深刻な矛盾が世界のあちこちで噴出しているが、ブルジョア階級に対する国際的な規模の階級闘争はいまだ登場しておらず、プロレタリアート人民の側には資本主義を打倒して新しい世界を建設していく準備はいまだ整っていない。

直面する一時代は革命運動の攻勢期ではない。われわれはこの一時代において、党の基本路線と基本組織を敵の攻撃から守りぬきながら、ねばり強く党的力量を発展させ蓄積することをめざす。しかし持久戦は単なる防衛戦ではない。それは同時にプロレタリアートの階級闘争の次の攻勢に向けた準備戦である。マルクスは『哲学の貧困』(一八四七年)のなかで「プロレタリアートの階級闘争の戦術」の問題にふれて次のように主張しているが、それは持久戦時代の党建設戦にのぞもうとしているわれわれに、多くのものを示している。「どの発展段階にも、どの瞬間にも、プロレタリアートの戦術は、この客観的に避けられない、人類史の弁証法を考慮にいれて、一方では先進的な階級の自覚と力と闘争能力を向上させるために、政治的停滞の時期、または龜の歩みのようにころのころとした、いわゆる「平和的」発展の時期を利用するとともに、他方では、その階級の運動の「終極目標」に向かって、「二〇年を一つに圧縮した」偉大な日々がきたとき偉大な任務を実践的に解決できる能力をこの階級のうちに

つくりだす方向に向かって、この利用の活動全体をおこなわなければならない」。

歴史は弁証法的に発展する。一見、停滞や後退とも見える時代の内部において、次の時代を準備する新しい要素が成長し、それが飽和状態を越えた時、新旧の時代の交代は誰も予想しなかつたような形態をとつて革命的に行われる。われわれの持久戦はこのような歴史の発展を踏まえたものでなくてはならない。持久戦は防衛戦であり同時に、共産主義という「終極目標」に向かう準備戦である。それは、何よりもきたるべき革命的激動期においてプロレタリア革命・プロレタリアートの武装蜂起とプロレタリア独裁権力の樹立というわれわれの当面の目的を達成するための準備戦である。

持久戦の時代の開始期において、この一時代の階級闘争を牽引するプロレタリアートの党の建設が何よりも問題にされねばならない。われわれはこの九六年を党建設の決定的な飛躍の年としてかちとらなければならぬ。

★ 建設すべき労働者階級の前衛党 ★

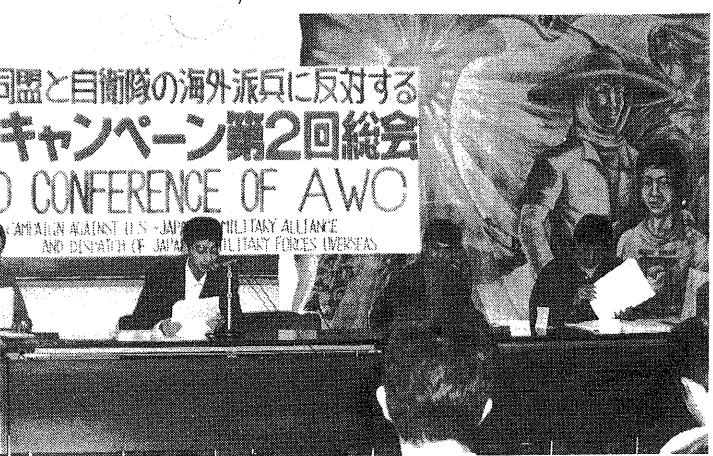
われわれが一貫してめざし続けなければならぬのは、プロレタリアートの前衛党的建設である。

プロレタリアートの党とは何か。党はプロレ

タリア階級の一部分である。党はプロレタリアートから遊離した特別の存在ではない。この意味で党は一つの階級組織である。しかし党はたとえば労働組合などのよう、プロレタリアートが生きんがため食わんがための要求を実現する手段として自然発生的に形成する階級組織とは決定的に異なる。プロレタリアートの党は、「労働者階級の直接当面の目的と利益を達成するためにたたかうが、しかし現在の運動のなかにあって、同時に運動の未来を代表する」(マルクス『共産党宣言』一八四八年)といふような階級組織である。プロレタリアートの党は労働者階級が現実の社会のなかにおいて掲げる当面の経済的・政治的要求を実現するためにたたかうだけでなく、同時にそのような要求が発生する根柢となる労働者階級に対する階級支配そのものの、賃金奴隸制度の廃絶のためにたたかうのである。プロレタリアートの党は、その基本的目的として共産主義革命・労働者階級の全面的解放を掲げ、その実現をみずから根本的任务とする。ここからプロレタリアートの党は必然的に、綱領的にも組織的にも実践的にもプロレタリアートの前衛としての性格をもつ。

マルクスはブランキズムや無政府主義者たちとの闘争を通じて、プロレタリアートの前衛党的建設していくことがプロレタリア階級解放の事業にとって不可欠であることを明らかにした。そしてロシアにおいてレーニンはプロレタリアートの前衛党的建設を通じて現実化し、世界最初の社会主義革命としてロシア革命を成功に導いた。レーニン主義・ボルシェビキ党建設路線を継承し、重武装し密集した強大な敵ブルジョアジーをプロレタリアートの武装蜂起をもつて暴力的に打倒しようとするわれわれは、日本におけるプロレタリアートの前衛党的現実的な形質を中央集権非合法党としてとらえる。

共産主義者同盟の歴史において、とりわけ第



写真は、国際統一戦線の前進を切り開いたAWC第二回総会

二次ブンドの分裂以降、われわれがブンドの一分派として担つてきた積極的役割は、建設すべき党をプロレタリアートの前衛党として一貫して措定し続けてきた点にあった。また内容的にも、すでに八〇年代にはブンドの一分派としての部分性を克服することができたのも、この点に根拠をもつものであった。

一九五八年の共産主義者同盟結成は、日本におけるプロレタリアートの前衛党建設のための最初の一歩であったと総括されるべきである。第一次ブンドは日共の民族主義・平和革命・議会主義に対し、世界革命・暴力革命・プロレタリア独裁・社会主義革命を対置して結成された。このような第一次ブンドが日共に対置した諸内容を継承・発展させていくことは、ブンドの歴史總体に責任を持つとするわれわれの重要な任務の一つである。しかしわれわれがより重視しなければならないのは第一次ブンドの個々の党内容ではなく、第一次ブンドが六〇年安保闘争という階級のたたかいの先頭に立つことを通じてプロレタリアートの党を建設しようとしたというその党観である。この点は、党建設を現実の階級闘争から切斷してサークル主義的に展望した革共同主義との鮮明な違いであった。

第一次ブンドが、その階級的基盤において小ブルの路線に統合されることのない雑炊的なものであり、いくつかの優れた党内容も党建設の分裂と分散を不可避にしたとはい、彼らが党の建設を現実の階級の前衛の建設として展望し実践しようとしていたことは、第一次ブンドからわれわれが批判的に継承すべき遺産の一つであった。

その後、六〇年代の大衆的高揚の開始とともに連合党として第二次ブンドが結成された。第二次ブンドは理論面・実践面で第一次ブンドを越える革命運動上のいくつかの成果を生み出しながらも、党建設の面では第一次ブンドにおける「前衛党建設の第一歩」を大きく越えることはなかった。現実の運動の戦術的左派的位置を占めることをもって、その運動に革命的性格を与えようとした第一次ブンドの戦術左派的位置を進民主主義的限界を、第二次ブンドもまた克服できなかつた。逆に第二次ブンドはそうした限界を拡大させていくことによって、一方ではその反動として帝国主義との闘争から逃亡する右翼日和見主義者を生み出し、他方では軍事戦術の急進化によって帝国主義打倒を希求する「左翼日和見主義者を生み出すところとなつた。そして、党内の論争・闘争は止揚されることなくブンドは再び分裂と解体の道をたどつた。

第一次ブンドの「前衛党建設の第一歩」は、われわれの手によってはじめて正しく継承された。七一年秋に結成された全国委員会派・第二段階党建設の破産を総括して出発したわれわれの七六年三〇一号路線のもとで、建設すべき党



全世界の人民と共に、現社会の根本的変革をめざす綱領を獲得しよう。(写真は、闘い続けるフィリピン新人民軍)

★ 党の革命的綱領 ★

われわれは九六年には、党の総路線の強化と武装をおし進め、持久戦時代における革命的プロレタリアートの進路としての党綱領の獲得をめざさなければならない。

共産主義運動の後退期にこそ、共産主義の実現を正面から掲げる党綱領の建設と、党の宣传活动が重視されねばならない。綱領の建設と綱領にもとづく党の宣伝活動の強化は、われわれの当面する党建設にとって死活的で重要な意義をもつている。自分が共産主義者であることを大衆の前で公然と宣言し、われわれの理想とするところを、またプロレタリアートの世界的任務と一国的任務の双方を包含するべきであり、両者を結合して打ち出すものでなければならぬ。

われわれの綱領は資本主義および、その最高の発展段階にある帝国主義に対する批判を前提として踏まえる。これに加えてわれわれの綱領は、一九一七年ロシア革命によって切り開かれた新しい時代・現代過渡期世界に対する批判を内包する。現代世界におけるプロレタリア前衛党の綱領は、レーニン・ボルシェビキ党が革命

の基本性格がプロレタリアートの前衛党として鮮明にされ、たたかいとするべき前衛党の形質が中央集権非合法党として提起されたのである。ここにおいてはじめてわれわれは、階級闘争に對する指導内容を戦術における左派的突出に求め続けてきたブンドの急進民主主義的限界の克服の道を開くと同時に、他方では革共同主義の陣営から激しく攻撃されてきた、階級闘争の先頭に立ち続けるなかで党の建設を展望するというブンドの党観を防衛し正しく継承することができたのである。以降われわれは、社共に代わる前衛党建設を掲げながらその内実においては社共の反対派にとどまり続けてきたブンドー新左翼運動の歴史的限界の克服をめざし、実態的な力量は小さくともプロレタリアートの前衛党としての全体性をもつ党の建設を進めてきた。そしていまわれわれは、持久戦の時代の到来のなかで、このブンド史において占めてきたわれわれの積極的位置を踏まえたうえで、党建設の新しい飛躍に挑戦しようとしているのである。

では、われわれの綱領はどのような性格と内容をもつべきか。

われわれの綱領は世界のプロレタリアートの共通する世界觀や時代認識、そして何よりもその歴史的任務を示すものでなければならない。世界党が存在せず、世界綱領が誰によつても提起されないなかでは、各国の原則的共産主義者は、みずから綱領を一国綱領的にきりちぢめていく傾向とたたかう義務をもつ。どの国の共産主義者であろうと、プロレタリアートの世界史的・国際的任務について自国のプロレタリアート人民に対して正面から提起することに意識的でなければならないからである。一国に限定して革命の性格や任務を論じてゐるような綱領は、かつても、そして世界がますます一体化を強め階級矛盾が世界的に噴出し続けている現代においてはなおさら前衛党の綱領としては通用しない。われわれの綱領はプロレタリアートの世界的任務と一国的任務の双方を包含するべきであり、両者を結合して打ち出すものでなければならぬ。

もつて大衆に対し提起し続ける党員の活動は、共産主義運動の後退期にこそいつそう重要性を増す。もっと言えばそのような党活動がなくなければ、党の存在意義もなくなり、党は前衛組織としては解体していくのである。

党的綱領は「結束した單一のたたかう党の旗印」(レーニン)である。党的綱領とは何かという問題についてのこの鮮明な規定は、党綱領を革命的実践と切離された単なるおしゃべり(政策の羅列、無責任な未来論...)にしてしまふ日和見主義を許さない。

の勝利のうちに採択した一九一九年綱領の原則的部分（資本主義批判・帝国主義批判）を継承しながら、これに現代過渡期世界批判を加えて十全なものとなる。すなわち、現代世界が資本主義から社会主義への世界的移行過程にあるという見地に立ちながら、社会主義世界への移行の物質的諸条件が現実の世界においてどのように成熟していっているのか、プロレタリアートはどういう運動を通じてこの世界を共産主義に向けて止揚していくのかを解明し提起する」とで、われわれの綱領ははじめて現代革命の綱領たりうるのである。

プロレタリアートは今日、世界的な闘争を通じて現代世界の深刻な矛盾を解決していくことを要求されている。われわれの綱領は、その解決の展望を單なる未来論としてではなくプロレタリアートの世界的任務として示し、今日の世界に代えてどのような世界がつくりだされるべきなのかという現代的問題に解答を与えるものとならねばならない。今日の世界のあり方に大きな疑問をもち、そのような状況を変えたいと望んでいる人々の疑問への共産主義者の側から回答もある。この点でわれわれの綱領は、共産主義論にもとづいて未来への希望と展望を、現代世界に生きる人民に提起するものでなければならない。

★ 政治的前衛活動 ★

九六年においてわれわれは党建設の最重要環の事業として、政治的前衛活動の新しい地平を切り開かなければならぬ。そしてまた持久戦時代に対応した新しい階級基盤の開拓のたたかいを、労働運動を中心にして開始しなければなく踏み越えることに成功した。われわれはアジア諸国・地域の共産主義者と協力し、アジアにおける国際反帝統一戦線建設の展望に立ち、小さくともアジア的広がりをもつ反帝共同闘争の試みを開始した。また国内においては、左派労働運動を主な基盤とし社会保護憲派、市民運動・学生運動の一部を糾合した大衆的政治闘争を、アジアにおける反帝共同闘争の一環として位置づけ、全国的規模で、かつ一定の恒常性をもつて組織してきた。これらはわれわれの政治闘争における鮮明な実践的党派性として定着した。しかし次の点では大きな問題点や飛躍課題を抱えてきた。①アジア数カ国を貫く反帝国際共同闘争の組織化にはまだ成功しておらず、これ



アジア人民に連帯する政治闘争を切り開くアジア共同行動

を可能にする政治的・組織的基盤をアジア的規模でいかに形成するのかが問われている。②国内の大衆的政治統一戦線形成の当面の主要な目的は、二大保守政党制攻撃での労働者人民の大衆的抵抗拠点と大衆的統一戦線の形成があるが、これにふさわしい広がりと重層的構造を持つべきだしない。③国内での大衆的政治運動の発展に比べて、これを牽引する位置にある党の宣伝・扇動活動、前衛的政治決起の組織化が十分ではない。」

政治闘争におけるこれら三つの課題に、われわれは昨年一年間、一定の力をさして取り組んできた。昨年秋、アジア七カ国・地域の代表が参加して開催されたAWC（日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対するアジアキャンペーン）

第二回総会とその後の各地方集会の成功によつて、前記①②の逢着課題に風穴をあける条件は広がった。また③の課題について、昨年はAPEC粉碎闘争や共産同政治集会の組織化などを通じて、一定の新しい展望が切り開かれてきた。拡大した条件を基盤にして九六年には、政治的前衛としての活動を国内外でいっそう強化された。また③の課題についても、昨年はAPEC粉碎闘争や共産同政治集会の組織化などを通じて、一定の新しい展望が切り開かれてきた。拡大した条件を基盤にして九六年には、政治的前衛としての活動を国内外でいっそう強化されなければならない。自衛隊のゴラン高原派兵、日米首脳会談・安保再定義・沖縄基地強化、第三回ARF（アセアン地域フォーラム）・APECミニラ会議などうち続く帝国主義の攻撃に対してわれわれは、みずから先頭で決起するとともに、労働者人民の立ち上がりをうながし、初步的な政治教育から革命的政治決起に至るいく層もの政治闘争を組織する政治的前衛としての力量の飛躍的な強化をめざさねばならない。

さらにわが国の階級社会の開始された大きな変化をふまえ、われわれの党建設と革命運動のもつとも重要な階級基盤である労働運動指導の強化をはかっていかねばならない。まず何よりも、日本独占の多国籍企業化が引き起こす国内産業の空洞化のなかで、増大する労働者下層に対する労働者人民の立ち上がりをうながし、初歩的な政治教育から革命的政治決起に至るいく層もの政治闘争を組織する政治的前衛としての力量の飛躍的な強化をめざさねばならない。

★ 組織すべき党派 ★

またわれわれは党建設の不可欠の一環として、国内外における党派闘争と党派間共闘の新しい発展を切り開いていかなければならない。

国内では小選挙区制下で初の総選挙がことし行われる可能性があり、社会党の新保守政党への解体・再編の動きは一挙に具体化する。社会党内部にとどまり続けてきた護憲派・良心的部派に対してわれわれは、彼らが社会党下では決して経験することのなかった国際主義政治闘争と、社会党に代わる党的建設への結集を彼らに呼びかける活動を強めねばならない。

社会党解体の進行とともに、社会党の後がまとまる日共は社会民主主義としていつそう純化していく。日共が社民として転落した大きな根拠となったものは、九一年のソ連崩壊にあった。九四年七月の第二〇回党大会において日共は、党綱領を大幅に改定し、社会主義・共産主義の実現という目標を綱領的に放棄し、自國帝国主義の権益の防衛、資本主義の擁護と改良を基本路線とする社会民主主義への転落を決定づけた。

旧新左翼諸派の党的解体も、引き続いだそろ深く進行するであろう。昨年それは、社会党的基本政策の転換・第二保守政党への転落、そして七月の参議院選挙を契機にして、護憲新党運動・新たな議会主義政党形成運動への解体等となつて現れた。ことし総選挙が行われることになれば、この動向はいっそう促進されざるをえない。帝国主義とたたかう政治闘争からの逃亡、プロレタリアートの階級的組織化からの逃亡、そしてプロレタリアートの前衛党建設からの逃亡は、右翼日和見主義諸党派においてますます顕著になっていくだろう。帝国主義国内の中間階層の代弁者としての階級的性格をますます強める彼ら右翼日和見主義諸党派は、一方で

は市民運動のなかにもぐりこんで、その改良主義的限界を固定化する役割を果たし、他方では、プロレタリアートの階級闘争とその前衛党をつくりあげていくたかいに対しても、らん限りの悪罵を投げつけ敵対を強めていくだろう。

とのあいだで党派間の政治共闘を形成し、アジア共同行動やAPEC粉砕闘争とともに担ってきたが、それはこうした右翼日和見主義諸党派のあからさまな右転落と共に対峙する質をもつものであった。同時にそれは、世界革命やアジア人民との連帯などを主張しながら実際には一国主義者であり、日本のプロレタリアート人民を国際主義のもとに結束させていくという決定的な任務に対する急進民主主義と分歧する質を内包するものであった。九六年には、われ

共闘を強化するという課題がある。われわれは八〇年代半ばから、いくつかの共産主義党・グループ、主要に毛派系共産主義党・グループとのゆるやかな党派関係を形成してきた。諸国共産主義党・グループとの接触と関係形成の活動は一定の成果を達成した。それらは新しく発展させられるべき段階を迎えている。われわれは当初から、国際的な党派関係の形成を世界党再建の一環として位置づけてきたが、いま問われているのは、これまでの基礎的な国際工作活動を踏まえて、われわれの理念を一

者たちとの実践的な團結を強めながら、九六年にはアジアにおける共産主義者協議会の建設を着実に前進させていかねばならない。

ために格闘し続けることは党建設において決定的な位置を占める。こうした組織内の闘争を不可欠としながら、われわれは九六年、党組織建設における大きな前進を必ずや実現するであろう。

われわれは全国のたたかう労働者人民に心から訴える。共産主義者同盟（全国委員会）にいまこそ結集して、九六年の階級闘争の先頭とともに立とう！

われと戦旗派との党派政治共闘は、
国際的にはアジア反帝統一戦線の建
設、国内的には二大保守政党制攻撃
に対峙する大衆的政治統一戦線の建
設と発展を共同で担いきる共闘関係
へとさらに飛躍させられねばならな
い。

歩でも一步でも前に進め現美化するための活動である。複雑な国際的党派関係のなかで、党としてのしつかりとした位置を築いていくための綱領＝総路線上の武装、系統的な国際工作活動の推進が必要となっている。

にすぎない。前衛の名にふさわしい組織を形成し続ける不斷なる努力を通じて、現実の党組織ははじめて前衛としての内実を蓄積していくことができる。党建設は不断なる自己変革戦である。党员と党組織が現状に安住することなく、より高い地平へと自己と組織をおし上げる

2-2

共産同政治集会が大成功

社共にかわる前衛党建設を決意

昨年一二月一日、共産同政治集会が開催された。集会には昨年秋、A WC第一回総会に全力で結集し、反帝アジア人民政治統一戦線建設のたかいを大きく飛躍させた先進的労働者・学生たちが参加している。保守二大政党制への再編のもとで、日本階級闘争の解体攻撃と正面から対峙し、反日帝国主義プロレタリアたちが結集している。こうして「今こそ、社共にかわる眞の共産主義前衛党を建設しよう」という熱い決意をこめ、沖縄を含む全国各地から結集した先進的労働者・学生、そしてわが同盟の同志たちの参加のもとで政治集会が開始された。

会場に結集した労働者・学生の熱気の中、共産同基調講演がはじまる。講演に立った同志は次のように提起

基調講演を提起



諸戦線から発言

続いて各戦線の同志たちから、今

続いて各戦線の同志たちから、今

後の闘争と決意表明が提起される。

昨年秋、AWC第一回総会—日本裏

行委員会建設を担い抜き、反APE

國等や安傑、河緑園等を領有してゐる。

保守一大政党制への封じこめを打ち

破り、ますます深まる帝国主義の侵

略反革命を、反日本帝国主義、プロ

レタリア主義の旗じるしの下に
一衆的二重のつまらへこら。つれ

この政治闘争は、分解する労働者の

相對的下層に立脚し、階級的労働運

動としつかりと結びつくることによつ

て前進させられるのだと。

そして、帝国主義労働運動の支配

に抗し、階級的労働運動の再建を粘り強く準備してきた同志が次のように呼びかける。ますます労働者階級が相対的な上層と下層に分解し、また外国人労働者が増大してきたことが生まれている。アジアへの大規模な企業侵出が生みだすアジア労働者への直接的な搾取と抑圧、他方での国内における産業空洞化、解雇・合理化・不安定雇用化の攻撃の嵐と対峙しつつ、アジア人民と強く連帯し、国際主義労働運動の戦列をともに

各地で12・8アジア共同行動

BAYANが米領事館に抗議

11・24

AWC第二回総会の大成功を受け、一二・八アジア共同行動が行われた。これに先立つ去年一月二四日、フィリピンのBAYAN（新民族主義者同盟）およびその傘下組織であるガブリエラ（全国女性団体連合）とLFS（フィリピン学生同盟）などによって、マニラの米領事館への抗議行動が行われた。この行動は、沖縄および日本の反米軍基地闘争・反安保運動に連帯する行動として組織されたものである。

比大使館に抗議の行動

昨年一二月八日、JPM'90と日比連帶運動・東京は、スマーキーマウントン住民へのフィリピン政府による強制立ち退き措置に対し、十数名でフィリピン大使館への緊急抗議行動を行った。この行動は、AWCに参加するアジア各国人民の相互連帶行動の一環として、急きよ組織されたものである。抗議団はまず、「スマーキーマウントンへの強制立ち退き措置を止め! 被害者とその家族への謝罪と充分な補償を行え! フィリピン二〇〇〇計画反対! 九六フィリピンAPEC反対! フィリピン人民と連帯してたたかうぞ!」などのシュプレヒコールを大使館の門前で

くりだそうと。
さらに、学生戦線でたたかう同志が次のように発言する。スター・リン

型社会主義の崩壊以降、帝国主義の矛盾が深まる中、人民の解放の希望としての共産主義の復権が重大な課題になってきた。一方で我が国の多くの学生・青年が未来への希望を失っており、他方で第三世界の先進的學生・青年が、現代世界の変革のために血を流して帝国主義とのたたかいを続けている。帝本國における反帝派の学生運動、国際主義派の学生運

動、プロレタリア派の学生運動を設するという任務はきわめて重大だ。
たたきつけ、大使館に入りするフィリピン人に抗議要請書を手渡した。これを聞きつけた大使館の職員があわてて応対にでてきたので、抗議団はスマーキーマウントンの強制立ち退き措置を中止することなど四項目の抗議要請文を説明した。大使館の職員は政治担当官であると表明し、この問題はフィリピンの内政問題なので抗議要請は受け入れられないとの対応に終始していたが、すでにこの問題が日本人カマラマンの重傷事件をともなった国際的な人権侵害問題になっていること、また多くの日本人民が深い怒りを抱き、スマーキーマウントン住民への支援連帯運動を行ってきたことなどが抗議団によつて徹底的に政治担当官へ突きつけられた。結局、政治担当官は、本国政府に要請文と抗議行動があつたことを伝えること、また要請項目については別途郵送による回答をおこなうこと、また正式のアポイントがあるならばいつでも公式に交渉することをしぶしぶ約束した。

このスマーキーマウントン住民への強制立ち退き措置は、日米帝國主義に従属した工業化計画である「フィリピン二〇〇〇計画」がフィリピン人民に犠牲を強いるものであり、日米帝とフィリピン支配階級だけが利益を得るものであるのかを鮮明に示すものである。日帝本國労働者人民の責務として、日帝のフィリピン侵

略と支配に反対し、たたかうフィリピン人民への支援連帯運動をさらに強化せねばならない。

講演中心に 首都圈集会

たたきつけ、大使館に入りするフィリピン人に抗議要請書を手渡した。これを聞きつけた大使館の職員があわてて応対にでてきたので、抗議団はスマーキーマウントンの強制立ち退き措置を中止することなど四項目の抗議要請文を説明した。大使館の職員は政治担当官であると表明し、この問題はフィリピンの内政問題なので抗議要請は受け入れられないとの対応に終始していたが、すでにこの問題が日本人カマラマンの重傷事件をともなった国際的な人権侵害問題になっていること、また多くの日本人民が深い怒りを抱き、スマーキーマウントン住民への支援連帯運動を行ってきたことなどが抗議団によつて徹底的に政治担当官へ突きつけられた。結局、政治担当官は、本国政府に要請文と抗議行動があつたことを伝えること、また要請項目については別途郵送による回答をおこなうこと、また正式のアポイントがあるならばいつでも公式に交渉することをしぶしぶ約束した。

このスマーキーマウントン住民への強制立ち退き措置は、日米帝國主義に従属した工業化計画である「フィリピン二〇〇〇計画」がフィリピン人民に犠牲を強いるものであり、日

昨年一〇月下旬のAWC第二回総会をうけて、「許すな、日米安保強化と自衛隊海外派兵! 沖縄民衆と連帯し、日米軍事基地を撤去させよう!」のメインスローガンをかけた一二・八アジア共同行動が首都圏においてもたたかわれた。

夕方、防衛庁裏の松町公園に集まつた労働市民は、「日米のアジア支配に反対し、アジア人民の連帯を推進する日本実行委員会」の斎藤一雄共同代表を先頭に防衛庁へと向かい、同代表を先頭に防衛庁へと向かい、在、日帝はますます海外派兵の強化拡大と日米安保の強化を策動し、新藤さんは、日帝が日米開戦とともに抗議要請文を提出した。そしてシユブレヒコールをあげ、抗議の意志を防衛庁へとたたきつけた。

その後、新富区民会館における講演集会が約七〇人の結集によって行われた。司会の中岡全國一般全国協議会が約七〇人の結集によって行われた。司会の中岡全國一般全国協議会の進行によつて、まず斎藤一雄共同代表から挨拶をうけた。斎藤さんは、日帝が日米開戦とともに抗議要請文を提出した。そしてシユブレヒコールをあげ、抗議の意志を防衛庁へとたたきつけた。

この問題は、スマーキーマウントン住民への支援連帯運動を行つたところなどが抗議団によつて徹底的に政治担当官へ突きつけられた。結局、政治担当官は、本国政府に要請文と抗議行動があつたことを伝えること、また要請項目については別途郵送による回答をおこなうこと、また正式のアポイントがあるならばいつでも公式に交渉することをしぶしぶ約束した。

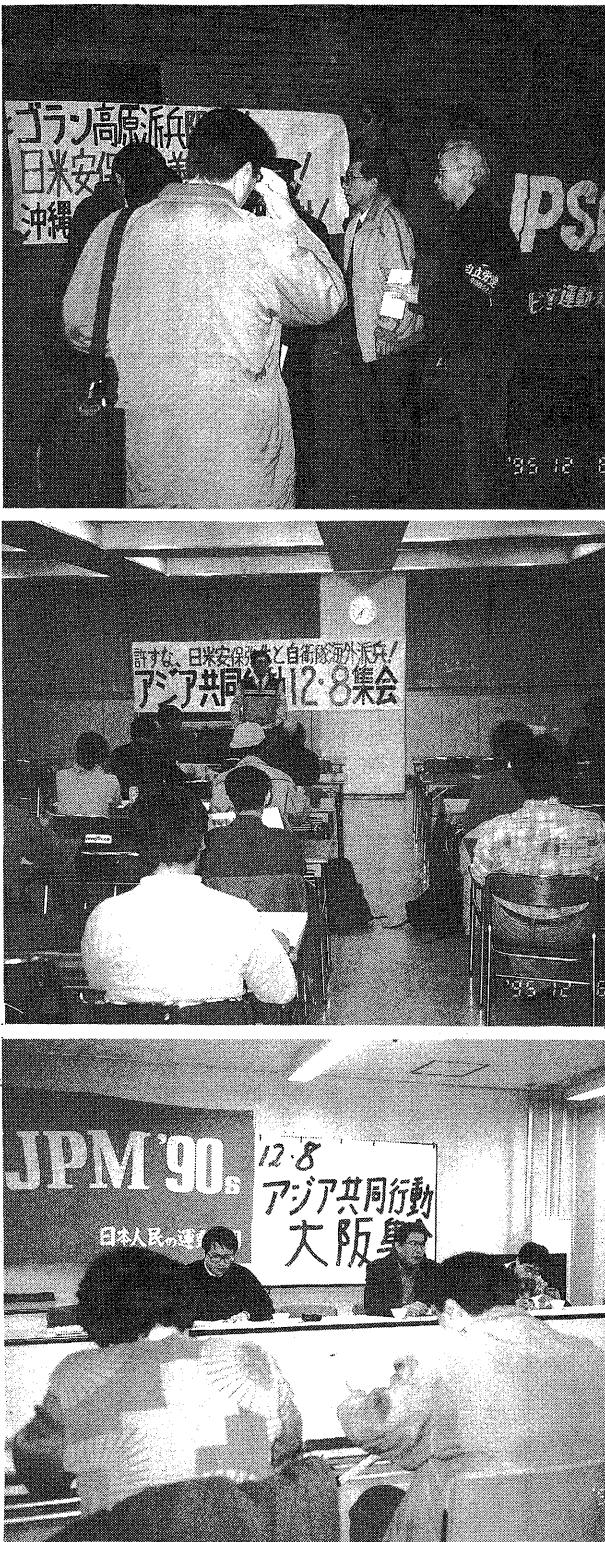
このスマーキーマウントン住民への強制立ち退き措置は、日米帝國主義に従属した工業化計画である「フィリピン二〇〇〇計画」がフィリピン人民に犠牲を強いるものであり、日

帝とフィリピン支配階級だけが利益を得るものであるのかを鮮明に示すものである。日帝本國労働者人民の責務として、日帝のフィリピン侵

動、プロレタリア派の学生運動を設するという任務はきわめて重大だ。
たたかいで大きく高揚している。これらたたかいでいつそう前進させ

たたかいで、アジア諸国人民の戦後補償のたたかいや、沖縄人民とそれに呼応した「本土」の基地撤去・安保粉碎の行動が報告された。

その後、「日米安保の再定義とは」と題して、軍事問題研究家の林茂夫



写真は上から、防衛庁行動、首都圏集会、大阪集会

弾搭載能力をもつ戦闘爆撃機であるF/SX導入など、進行する自衛隊の海外派兵・地域紛争対決型への再編を具体的に説明した。

りつつあることを示していると指摘し、日本社会の雰囲気が軍事大国のそれに変化してきてることに警鐘を鳴らし、講演を終えた。

時三〇分からエル大阪において、J.P.M.90の呼びかけによる「日米のアジア支配に反対しよう！ アジア共同行動大阪集会」が開催された。

京都・大阪 集会が成功

けた護衛艦隊と航空自衛隊による上陸・軍事占領作戦の大規模演習を展開したように、地域紛争対決型になつていることが暴露された。そして、新「防衛大綱」や防衛白書に明らかのように、全体的に自衛隊がコンパクト化・合理化される中で殴り込み部隊の部分（護衛艦隊・輸送・空挺団・ヘリコプターなど）はむしろ強化され、また沖縄や西日本の第一・第二混成団が旅団に格上げされて車や重火器が付加されるなど、まさに自衛隊の海兵隊化が進んでいることが明らかにされた。さらに空中給

役務融通協定)によつて民間人をも大幅に動員することであると林さんはまとめた。そして、日本の社会体には体制へと転換してきている危険性を訴えた。カンボジアPKO部隊には軍事勲章や特別報奨金が首相から授与された。また、一九三七年七月七日の中国への全面侵略戦争時には、同年の七月二一日の衆議院でこれへの感謝決議が上げられた。そして、一九九五年には地方議会でかつての侵略戦争を賛美する英靈感謝決議があげられた。林さんは、これらは日

京都・大阪 集会が成功

さんから約七〇分に渡る講演をうけた。林さんは、日米安保の再定義とは、具体的な事態からこれを捉えなければならないと語り、次のように話しを進めた。まず「冷戦」時代とその後の米帝軍事戦略の違いを特徴づけ、米ソ核対決型から地域紛争対決型への転換について説明した。そして現在、米海軍全体を強襲殴り込み部隊である海兵隊のようにし始めたことを暴露した。そして、空母部隊の訓練が超低空攻撃を中心にしているように、まさに地域紛争を対象にして、軍事スペイ活動の強化・海軍全体の海兵隊化が進行していると説明した。しかも自衛隊がこれに対応し、九五年九月に南西諸島で「レインボーエクスプレス」と名づけられた。

化・ホストネーションサポート・ACSAsなどを通じて進め、②アジア太平洋地域での日米共同軍事作戦として、アジア・中東などの地域紛争に共同軍事出動する、③PKOsと「国際的人道救援」を軸に日米軍事協力を地球的規模で推進することなどが打ちだされ、自衛隊の再編もこの方向でどんどん進んでいることが説明された。PKOについても自卫队完結型から日米共同運用・相互支援型へと進み、この新しい形態の最初のものとしてゴラン高原への自衛隊派兵が準備されているという。したがって、日米安保の「再定義」とは、アジア太平洋での日米共同軍事出動であり、自衛隊が本格的な海外侵略を担うことであり、ACSA（物語）

米軍用地強制使用拒否のたたかいへの支援と反安保闘争の前進を訴えた。またRCPCは、沖縄人民の闘争おより基地撤去・安保粉碎闘争への連帯を表明し、フィリピンでも米軍基地をたたき出した後、ACSAによる米帝のフィリピン軍事基地化が進んでいることを明らかにし、日米軍事同盟と日米帝国主義に対するアジア人民の共同闘争を前進させようとした。集会の最後に日本実の全国幹事である東交労組地下鉄建設副支部長の鶴居さんがまとめの発言をおこない、AWCの前進とアジア共同行動の発展、そして沖縄人民と連帯した基地撤去・安保粉碎のたたかいに向けた団結ガンバローをもって集会は終了した。

では、昨年一月二〇日の五〇〇人を結集した円山集会を継承し、九年の三月に再び前回に倍する結集で沖縄人民に連帯し、米軍基地撤去・安保廃棄を要求する総決起闘争をおこなうことを確認した。

軍用地強制使用拒否のたたかいへの支援と反安保闘争の前進を訴えた。また RCPCC は、沖縄人民の闘争おび基地撤去・安保粉碎闘争への連帶を表明し、フィリピンでも米軍基地をたたき出した後、ACSA による米帝のフィリピン軍事基地化が進んでいることを明らかにし、日米軍事同盟と日米帝国主義に対するアジア人民の共同闘争を前進させようとした。集会の最後に日本実の全国幹事である東交労組地下鉄建設副支部長の鶴居さんがまとめの発言をおこない、AWC の前進とアジア共同行動の発展、そして沖縄人民と連帯した基地撤去・安保粉碎のたたかいに向けた団結・ガンバローをもって集会は終了した。

京都・大阪 集会が成功

京都においては、二月七日午後六時三〇分から南セツルメントにおいて、アジア共同行動・京都の主催による「沖縄のたたかいと結合し、日米安保の再定義を阻止しよう！」日のアジア支配に反対するアジア人民の国際共同闘争を！二月アジア共同行動京都集会」が開催された。大阪においては、二月八日午後六時三〇分からエル大阪において、JPM'90 の呼びかけによる「日米のアジア支配に反対しよう！アジア共同行動大阪集会」が開催された。この二つの集会は、フィリピンの回総会を受けたアジア人民の国際共同闘争をさらに発展させていくことを目的とするものであった。また、沖縄人民のたたかいと結合し、高根する反基地・反安保闘争をアジアと民との連帯という立場から発展させることをめざすものであった。

二つの集会に参加した ST-アジアの活動家は、二月八日こそ日本がアジア全域への侵略戦争を開始した日であり、この日にアジア人民の連帯をめざす集会が開催されたとの意義は大きいと指摘した。そして、APEC の動きはアジア人民に一層の搾取と収奪をもたらすものであると批判した。フィリピンにおいても、「フィリピン二〇〇〇計画」や「カラバルソン計画」などの工業化計画が推進されているが、それれますます米日などの外国資本に利益をもたらすだけであり、フィリピンの人民には苦しみだけを与えるものであることを暴露した。そして、強化される日米安保や自衛隊の海外派兵は、このアジアに存在する米日・海外権益を防衛するためのものでないと批判し、アジア人民の連帯と國際共同闘争の前進こそが求められると提起した。

京都と大阪の集会では、この講演を受け、一九九六年のたたかいを WCC と結合してさらに発展させていくことを確認した。そして京都集会では、昨年一月二〇日の五〇〇人を結集した円山集会を継承し、九〇年の三月に再び前回に倍する集会で沖縄人民に連帯し、米軍基地撤去・安保廃棄を要求する総決起闘争をむかふることを確認した。

村山首相の大田知事告訴弾劾 米軍用地強制使用を阻止せよ

現在、沖縄労働者人民の基地撤去、安保廢棄を要求するたたかいが爆発している。この基地と安保に対する沖縄労働者人民の怒りは、まさに五〇年にわたって強制されてきた基地の重圧のもとで蓄積されたものである。それが昨年九月四日の米兵による少女強姦事件を引き金に、一挙に堰を切って吹きだしたのである。そしてこの噴出する怒りは、大田沖縄県知事をして軍用地強制使用手続きの一環である土地物件調書への代理署名の拒否へといたらしめた。このことによって、昨年一〇月二一日の県民大会への八万五千人の大結集にも示された沖縄労働者人民の反基地・反安保の大流動は、反戦地主のたたかいとがちりと結びついたのである。

今や反戦地主と沖縄労働者人民のたたかいは、日帝の安保・基地政策の根幹を揺るがすたたかいとして、一切の後退も妥協も許さない日帝との全面対決へと踏みだしている。先進的労働者人民はこの沖縄労働者人民のたたかいと結合し、沖縄「本土」を貫いて、安保粉碎・基地撤去のたたかいを断固として推進しなければならない。反戦地主とともに米軍用地強制使用を断固として阻止しよう。四月一日の知花昌一さんの軍用地奪還闘争から、日米首脳会談「日米安保『再定義』粉碎へ向かうたたかいに総力で決起しよう。

強制使用の歴史と

反戦地主会の闘い

沖縄の基地は一九四三年から四年にかけて、第二次帝国主義戦争の中で日帝が強制的に住民の土地を奪い、基地を建設したことにはじまる。沖縄の基地は一九四三年から四年にかけて、第二次帝国主義戦争の中で日帝が強制的に住民の土地を奪い、基地を建設したことにはじまる。また四年の沖縄戦において、米軍はすべての住民を収容所に隔離するとともに、無人と化した地域に「まるで地図に白線を引くようにして」基地を建設していく。住民が収容所から解放されると元の住居に戻ってきたときには、住民の土地はすでに基地にされてしまっていたのである。さらに朝鮮戦争のあと、米帝は戦略的な反共軍事拠点として本格的に沖縄を位置づけ、文字通り「銃剣とブルドーザー」で米軍基地建設のために新たな土地接收をくり返した。このようないくつかの基地の建設過程に規定されて、沖縄では今まで多くの私有地が基地にされている。ちなみに「本土」の軍用地はほとんどが国有地である。

この私有地である軍用地については、七二年の「復帰」以降、日本政府が地主と賃貸借契約（期限は一〇年間）を結び、それを米軍に提供するという方法が取られている。しかし反戦地主は「自分の土地を戦争のために一坪たりとも使わせない」と政府との賃貸借契約を拒否し、軍用地の返還を要求してたたかい続けてきた。これに対して日帝は「復帰」後二三年間、反戦

地主の土地を強制使用し続けるとともに、反戦地主の根絶のために経済的・社会的なさまざまなかな圧力をかけてきた。

まず七二年の沖縄「返還」を前にして、日帝は「公用地法」という五年間の時限立法をもつて反戦地主の土地を強制使用する「法的根拠」とした。その期限が切れた七七年、反戦地主を先頭にする沖縄労働者人民のたたかいは、軍用地専有の「法的根拠」を失った日帝が軍用地の不法占拠において、「安保に風穴を開けた四日間」の事態を生みだす。追いつめられた日帝は、付則として「公用地法の五年間延長」をまぎれこませた「地籍明確化法」を成立させるというなりふり構わぬ方策によって、さらに五年間の強制使用の延長をはかった。その期限切れである八一年からは、日帝は米軍用地特別措置法を「法的根拠」として持ちだしてきている。日帝は、最初から賃貸借契約を拒否してきた反戦地主の土地について八一年から五年間、さらにその期限が切れた八七年から一〇年間、また七二年に賃貸借契約が九一年に再契約を拒否した地主の土地について五年間、米軍用地特措法によって三度にわたる強制使用をおこなってきたのである。

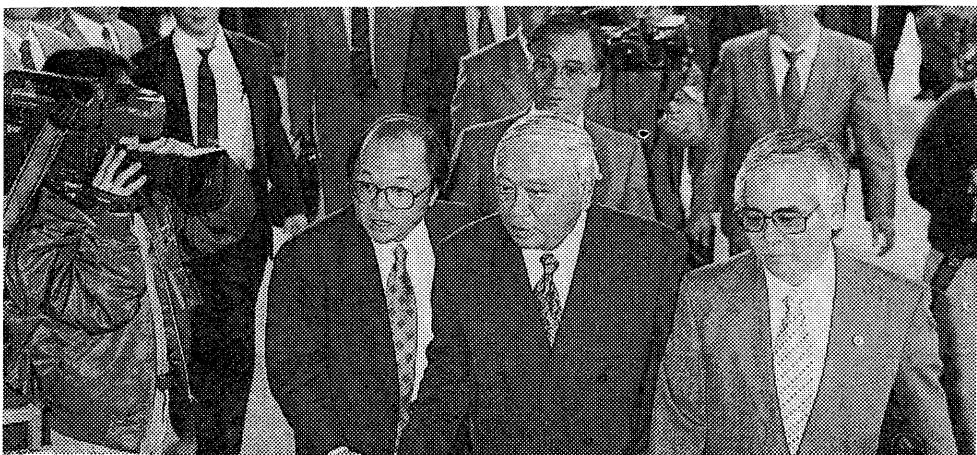
こうして九七年五月に、八七年から一〇年間の強制使用をされている反戦地主の土地、および九一年から五年間の強制使用をされている反戦地主の土地が、強制使用的期限切れを迎える（楚辺通信基地にある知花昌一さんの土地のみ今年三月三日に期限切れ）。日帝はこの強制使用期限切れを控えて、昨年三月から四度目の

軍用地強制使用を阻止する総決起へ

米軍用地特措法をもつてする強制使用手続きを開始してきた。その手続きの一環として、政府が沖縄県収用委員会へ強制使用裁決申請をする際に必要とされるものが「土地物件調書」であり、そこには調書内容に間違いがないことを確認する者（地主）の署名が必要である。しかし土地物件の現状を確認せよと言われても、立ち入りすら拒否され続けてきている基地内の土地の現状をどうして確認しえようか。何よりもそもそも自分の土地を強奪しようという手続きをどうして認めるべきようか。こうして多くの反戦地主が署名を拒否した。手続き上、地主が署名を拒否した時には、起業者（日帝）は当該市町村長に代理署名を求める。しかし那覇市長、沖縄県知事は、「軍用地の強制使用に手を貸すことは出来ない」とこれを拒否した。そのため日帝は、この三市村分の代理署名を沖縄県知事に求めた。

これが九五年の八月二一日のことであった。そして知事がこれに対する明確な態度を未だ表明していないなかたまさにその時期に、米兵による少女強姦事件が発生し、全沖縄的な基地に対する怒りが爆発したのである。それは代理署名問題で逡巡する知事の動搖を完全に吹き飛ばしてしまい、九月二八日の知事の代理署名拒否表明を生みだした。このことによって沖縄労働者人民の怒りは反戦地主会のたたかいと結合し、そしてこのことによって基地と安保を根底から揺さぶるものとなってきたのである。

県知事の代理署名拒否に対して、日帝・村山政権は何としても知事に代理署名をさせようと実にさまざまな懐柔策をやつぎばやに示した。それは何よりも、楚辺通信基地（通称「象のオリ」）の知花昌一さんの土地に対する軍用地使用期限が今年三月三一日に切れるという事態を控えて、強制使用手続きを一日でも早くおし進めめる必要があるからであり、さらには社会党と村山首相が軍用地強制使用に直接手を染めるという事態を回避したいという虫のいい動機からであった。



「職務執行命令訴訟」第1回公判に出席する大田知事(95年12月22日、那霸)

「もしも村山首相は軍用基地の強制使用に直接のけださざるをえないところにまで追いつめられたのである。

したがって村山首相によつて示された懐柔策のほとんどは、後に政府によつて正式に否定されるという極めて場当たり的なものでしかなかつたし、何よりも基地撤去を求めてたち上がつてゐる沖縄労働者人民の要求にいささかも応えるものではなかつた。それは当然にも、労働者人民の怒りにおされて代理署名を拒否している知事の翻意を促しうるものではなかつた。そして、ついに村山首相は軍用地の賃借使用に至つて、

できるまでには県収用委員会への裁決申請、市町村長による裁決申請の公告総覽、収用委によると公開審理と強制使用裁決という段階を経なければならず、到底三月三一日の知花昌一さんの土地に対する軍用地使用期限切れまでには手続きが間にあわなくなってしまっているという事情がある。したがって日帝が現在策動しているのは、県収用委への四月一日から六ヶ月間の「緊急使用申請」をもって知花さんの土地の不法占拠状態の発生を回避しつつ、その六ヶ月間に強制使用手続きを終了させることにある。そのためには、三月三一日までに県収用委へ強制使用裁決申請がなされていることが不可欠の条件なのである。そうであればこそ日帝は、遅くとも三月末までに村山首相の勝訴判決を得ることが絶対に必要になっているのである。

このような状況の中で、米兵による少女強姦事件を引き金に爆発した沖縄労働者人民のたたかいの焦点は、軍用地強制使用阻止へと鮮明に煮つめ上げられてきている。この中で、昨年一〇・二一の八万五千人の決起に示された大高揚する反基地闘争の領導部分として、反戦地主・一坪反戦地主会・違憲共闘の陣型が明確に登場してきている。一二月一四日には「職務執行命令訴訟糾弾、軍事基地の全面返還要求県民大会」が圧倒的にから取られ、この陣型による断固としたたかいの一步が踏みだされた。一二月一二日の第一回公判をもって開始された直面する政治焦点の「職務執行命令訴訟」裁判闘争を反戦地主を軸にたたかい抜く中から、四月一日の知花昌一さんの軍用地奪還を実現していかねばならない。そしてその勝利を反基地闘争の一大橋頭堡として獲得し、九七年五月の多くの反戦地主の土地の強制使用阻止へと突き進んでいかねばならない。

四月日米首脳会談

主義的権益の防衛のために、日米安保をこの地域全体に適用しうる侵略反革命軍事同盟へと再編強化することで一致している。この中で在沖米軍基地は、帝国主義者の「基地の整理・統合・縮小」の空文句とは裏腹に安保の要としてさらに強化されようとしている。米帝はくり返しあジアに展開する米軍一〇万人体制、在日米軍四万七千人体制に変更はないと言明し、在沖米軍基地についても「機能の低下をもたらすようなことは拒否する」と言い放っている。一方日帝は、昨年一月に予定されていた安保「再定義」を受けてという形で打ちだそうとしていた「防衛計画の大綱」の改定を、順序は逆になつたが一二月に閣議決定した。その中で沖縄配備の陸上自衛隊を混成団から旅団へと強化する方針が盛り込まれた。日米首脳会談一安保「再定義」は、アジア諸国人民のたたかいに対する一層の軍事的支配の強化を意味している。そのもとで、日米帝国主義の侵略反革命前線基地として沖縄にはますます戦略的に重要な位置が与えられ、沖縄労働者人民にはさらなる基地の重圧がもたらされようとしている。

今日、日米安保体制と最も先端で対峙しているものこそ沖縄労働者人民の反基地・反安保のたたかいであり、軍用地強制使用阻止闘争である。沖縄「本土」を貫く軍用地強制使用阻止闘争の一層の爆発をたたかいとり、そのただ中から四月日米首脳会談一安保「再定義」粉碎へと全力で決起しよう。